

地域研修報告書

2021



Hokkai-gakuen University



1 2021年度『地域研修報告書』の発刊にあたって

2・3 地域研修1年間の流れ・2021年度研修地一覧

4~38 地域研修ゼミ報告 (2021年度 地域研修Ⅰ・Ⅱ 参加32ゼミ 計366名)

4	1部浅妻ゼミⅠ・Ⅱ オホーツク地域におけるバイオマス資源活用の社会的意義と経済性評価 研修地／北見市・網走市		24	1部早尻ゼミⅡ 「川上」と「川下」をつなぐ木育の構想 研修地／札幌市、鹿児島県垂水市・鹿児島市	
5	2部浅妻ゼミⅠ・Ⅱ 厚真町における震災復興の現在地 研修地／厚真町		25	1部平野ゼミⅠ 大学生協でのフェアトレード商品販売再開の取組と調査 研修地／札幌市	
6	1部・2部上園ゼミⅠ 町政と地域づくりー産業・観光・生活 研修地／豊富町		26	1部平野ゼミⅡ 函館市におけるSDGsに関する取り組みの現状 研修地／函館市	
7	1部内田ゼミⅠ・Ⅱ 恵庭市の「花」「農」「子育て」とまちづくり 研修地／恵庭市		27	2部平野ゼミⅠ・Ⅱ 札幌市内企業のSDGsとフェアトレードの取り組み 研修地／札幌市	
8	2部内田ゼミⅠ・Ⅱ 函館市のまちづくりの課題を学ぶ 研修地／函館市		28	1部藤田ゼミⅠ 地方鉄道における沿線観光資源を活用した地域活性化 研修地／秋田県北秋田市・仙北市	
9	1部大貝ゼミⅠ 十勝地域における地域経済プラットホームの形成 研修地／帯広市・音更町・本別町・芽室町		29	2部藤田ゼミⅠ 鉄道ミュージアム構想の検討とワーケーション体験 研修地／沼田町	
10	1部大貝ゼミⅡ 宮城県酒造業界の独自の展開を学ぶ 研修地／宮城県仙台市・大崎市・加美町・気仙沼市		30	1部古林ゼミⅠ 大都市近郊の自然公園の現状と役割 研修地／野幌森林公園(札幌市)	
11	2部大貝ゼミⅠ・Ⅱ ミッションコア企業の可能性を探る 研修地／函館市・木古内町		31	1部古林ゼミⅡ 地域経済におけるジオパークの意義 研修地／洞爺湖町	
12	1部・2部川村ゼミⅠ・Ⅱ・Ⅲ 新型コロナウイルス禍の下での学生アルバイト等 コロナ下における看護労働 研修地／札幌市		32	1部水野ゼミⅠ・Ⅱ 朝鮮人労働の現場を見学し、実態を学ぶ 研修地／幌加内町朱鞠内	
14	1部佐藤(信)ゼミⅠ コープさっぽろ独自の事業活動を学ぶ 研修地／江別市・札幌市		33	1部水野谷ゼミⅠ・Ⅱ 持続可能な観光とは何か 研修地／旭川市・豊浦町	
15	1部佐藤(信)ゼミⅡ コープさっぽろとSDGs 研修地／札幌市		34	1部宮入ゼミⅠ・Ⅱ 都市近郊農業の存立条件と課題 研修地／石狩市	
16	1部西村ゼミⅠ・Ⅱ 浦幌班 産学連携による高齢者の買い物支援動画の制作 研修地／浦幌町		35	2部宮入ゼミⅠ・Ⅱ 総合野菜産地からみた北海道農業の未来像 研修地／富良野市	
18	1部西村ゼミⅠ・Ⅱ 下川班 持続可能な社会を目指す下川町における町民主体のまちづくり 研修地／下川町		36	1部山田ゼミⅠ 富良野市のスマートシティを探る 研修地／富良野市	
19	1部西村ゼミⅠ・Ⅱ 白老班 白老町における食と多文化共生の観光まちづくり 研修地／白老町		37	1部山田ゼミⅡ 安平町のデジタル・情報発信 研修地／安平町	
20	2部西村ゼミ・濱田ゼミⅠ・Ⅱ合同研修 旧・留萌鉄道沿線の「炭鉱街(やま)の記憶」 研修地／沼田町・赤平市・芦別市	 	38	2部山田ゼミⅠ・Ⅱ 新型コロナ禍での観光計画の実施状況について 研修地／倶知安町	
23	1部濱田ゼミⅠ・Ⅱ コロナ禍における洞爺湖町の移住定住者の動向と観光 研修地／洞爺湖町				

39 地域研修報告会

2021年度 『地域研修報告書の発刊』にあたって

北海学園大学経済学部長 石井 健



地域研修は地方自治体、民間企業、非営利団体など、地域のさまざまな関係者をたずねてその活動に触れ、学ぶ科目です。開設されたのは、経済学部が経済学科と地域経済学科の2学科体制を取るようになった2003年のことです。当初は地域経済学科のみでおこなわれていましたが、現在では、経済学科でも一部のゼミで行われるようになっており、いまや経済学部を代表する科目となっています。活動単位はゼミで、夏休みに現地研修（フィールドワーク）を行い、それに先立つ事前学習と、研修後の成果のまとめと地域研修報告会での発表から構成されています。座学でえられた知識や理論が研修を通じて生きた現実と交差し、研かれ、血肉化し、新たな問題意識が生まれて、さらに学びが深まっていく。地域研修にはこうした知の螺旋的な活動を促す力があります。

それほど貴重な場である地域研修ですが、今年度は、昨年度に引き続き、コロナ禍の下での実施となりました。本来であれば現地での研修が本番となる夏休みにコロナ第5波が直撃し、予定されていた研修の全てを延期や中止へと追いやるなど、大変困難な状況に陥りました。その後の沈静期に当初計画の変更・短縮など行った上で、なんとか現地研修を再実施し、年末の「地域研修報告会」の開催と、今回の報告書発行にこぎ着けることができました。これもひとえにご協力いただいたみなさまのお陰と存じます。心から感謝申し上げます。

この地域研修報告書には、昨年度同様、コロナ禍という特殊な状況下における研修先の地域の様子と、研修に向き合う学生たちの姿が留められています。研修が当初予定していたものとはことなってしまう、満足のいかなかったところや涙を吞んだところも少なからずあったことでしょう。それでも、その経験自体が貴重なものですし、かならずや将来の糧となることでしょう。

この報告書に触発され、自分も地域研修を学んでみたいと思ったみなさん、是非とも次の参加を願ってやみません。



地域研修1年間の流れ

地域研修は夏休みに行われる現地研修と、事前学習・事後学習・報告会でのプレゼンテーションから構成されます。教室での経済学・地域経済学関連の講義から学んだことと、地域のリアルな実態を結びつけて理解するために、複合的な要素から構成した実践的な科目です。

4月 ● 地域研修ガイダンス

担当教員から講義の趣旨やスケジュールなどに関し、ガイダンスを受けます。

6月 ● 事前学習（研修テーマなどの決定）

ゼミ担当教員の指導のもと、ゼミ単位で研修対象地域の社会、経済状況などについて、自ら収集した資料によって、研究対象地域の概要を勉強します。

8月 ● 地域研修実施

おおむね夏休み後半から10月初旬にかけて現地研修を行います。現地研修では自治体・関連団体・企業などからのヒアリング、施設見学、アンケート等の実態調査、フィールドワーク、などを行います。

10月 ● 事後学習

ゼミ担当教員の指導の下、研修成果をまとめます。また予定される地域研修報告会に向けて準備を行います。

12月 ● 地域研修報告会

地域研修の成果に基づいて研修レポートを作成し、ゼミ単位で発表を行い研修成果をゼミ相互で確認しあいます。

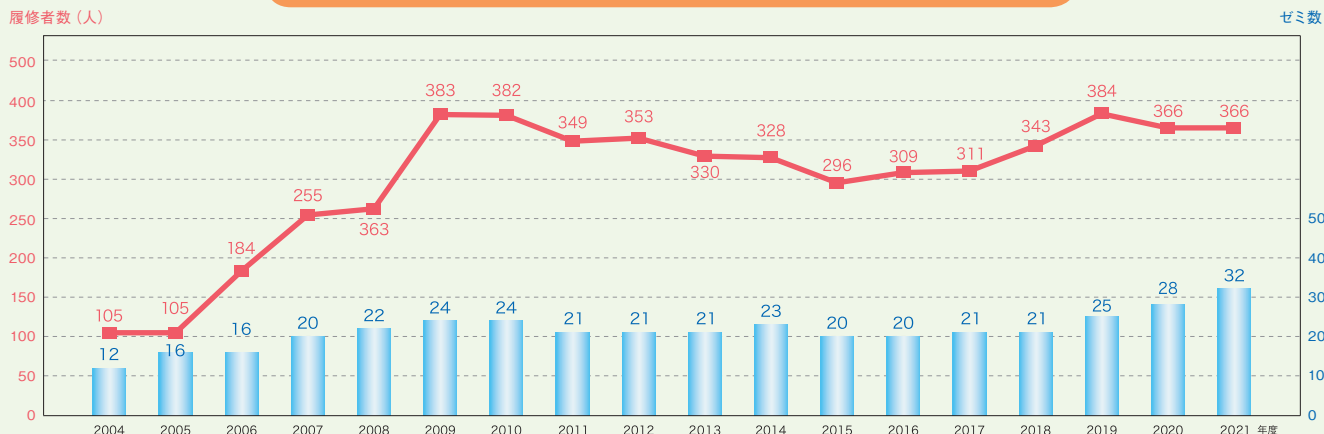
3月 ● 地域研修報告書の作成

地域研修報告会の研修レポートをもとに、研修の成果を報告書としてまとめます。



①事前学習。②③④⑤⑦⑧ 現地研修。⑥ 翌日の研修の準備。⑨ 現地報告会。⑩ 地域研修報告会。

地域研修履修者数と実施ゼミ数



研修地一覧

空知総合振興局管内

- A 沼田町 2部藤田ゼミⅠ、
2部西村ゼミⅠ・Ⅱ、2部濱田ゼミⅠ・Ⅱ
B 赤平市 2部西村ゼミⅠ・Ⅱ、
2部濱田ゼミⅠ・Ⅱ
C 芦別市 2部西村ゼミⅠ・Ⅱ、
2部濱田ゼミⅠ・Ⅱ

上川総合振興局管内

- D 下川町 西村ゼミⅠ・Ⅱ
E 幌加内町 水野ゼミⅠ・Ⅱ
F 旭川市 水野谷ゼミⅠ・Ⅱ
G 富良野市 2部宮入ゼミⅠ・Ⅱ、
山田ゼミⅠ

宗谷総合振興局管内

- H 豊富町 上園ゼミⅠ、
2部上園ゼミⅠ
オホーツク総合振興局管内
I 北見市 浅妻ゼミⅠ・Ⅱ
J 網走市 浅妻ゼミⅠ・Ⅱ

十勝総合振興局管内

- K 帯広市 大貝ゼミⅠ
L 芽室町 大貝ゼミⅠ
M 音更町 大貝ゼミⅠ
N 本別町 大貝ゼミⅠ
O 浦幌町 西村ゼミⅠ・Ⅱ

後志総合振興局管内

- T 倶知安町 2部山田ゼミⅠ・Ⅱ

胆振総合振興局管内

- U 厚真町 2部浅妻ゼミⅠ・Ⅱ
V 安平町 山田ゼミⅡ
W 白老町 西村ゼミⅠ・Ⅱ
X 洞爺湖町 古林ゼミⅡ、
濱田ゼミⅠ・Ⅱ
Y 豊浦町 水野谷ゼミⅠ・Ⅱ

渡島総合振興局管内

- Z 函館市 2部内田ゼミⅠ・Ⅱ、
2部大貝ゼミⅠ・Ⅱ、平野ゼミⅡ
AA 木古内町 2部大貝ゼミⅠ・Ⅱ

- P 札幌市 川村ゼミⅠ・Ⅱ・Ⅲ、
2部川村ゼミⅠ・Ⅱ、佐藤ゼミⅠ、
佐藤ゼミⅡ、早尻ゼミⅡ、
平野ゼミⅠ、2部平野ゼミⅠ・Ⅱ、
古林ゼミⅠ

石狩振興局管内

- Q 石狩市 宮入ゼミⅠ・Ⅱ
R 江別市 佐藤ゼミⅠ
S 恵庭市 内田ゼミⅠ・Ⅱ

秋田県北秋田市 藤田ゼミⅠ

仙北市 藤田ゼミⅠ

宮城県
気仙沼市
大貝ゼミⅠ・Ⅱ

大崎市・加美町
大貝ゼミⅠ・Ⅱ

仙台市 大貝ゼミⅠ・Ⅱ

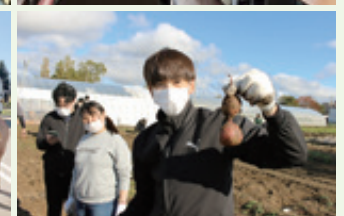
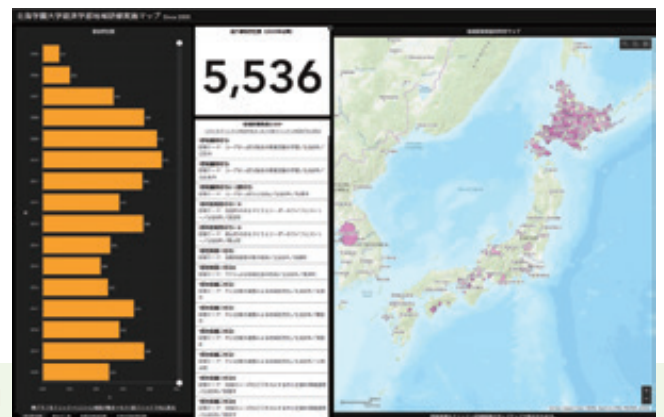
鹿児島県
鹿児島市
早尻ゼミⅡ

垂水市 早尻ゼミⅡ

▶▶ 経済学部webサイトで、これ
までの研修地や参加者数を、
地図化して掲載しています。



<https://econ.hgu.jp/program/field-work.html>



1部 浅妻裕ゼミ1・II

参加学生数 22名



浅妻 裕

経済学科
教授



エース・クリーン社にて

オホーツク地域におけるバイオマス資源活用の 社会的意義と経済性評価

研修地：北見市・網走市

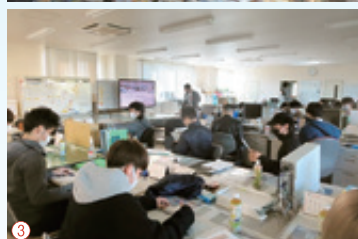
●研修目的

オホーツク地域は、畜産系廃棄物や間伐材などを利用したバイオマスエネルギーの活用が進んでいる。本研修では、この活用の現状把握と背景を明らかにすることを目的とした。また、地域経済や資源賦存に関するデータを各種統計から明らかにすることも追究した。

研修先・日程

- 10月18日 株式会社WIND-SMILE 網走バイオマス発電所
北見市留辺蘂町花園堆肥センター
河川敷伐採現場視察
- 10月19日 国土交通省北海道開発局網走開発建設部北見河川事務所（リモート）
株式会社エース・クリーン
北海道オホーツク総合振興局産業振興部林務課
- 11月7日 湧別町役場農政課農政グループ（リモート）

写真①留辺蘂堆肥センターにて説明を受ける。②留辺蘂花園堆肥センターに持ち込まれた生ごみ。③エース・クリーン社にての講演。④オホーツク総合振興局にて質疑応答を行う。



●総括

オホーツク地域は、森林資源の賦存量が豊富であり、エネルギー資源としての活用が進んでいる。WIND-SMILE社の発電所は、周辺地域の林地未利用材を活用していることに加え、雇用や廃熱の養殖等での利用という点でも地域経済に貢献している。木材調達価格以上に安定供給が重要課題であるが、豊富な賦存量がこれを担保している。

一方で、木材の伐採・搬出は、一連の活用フローの中でも費用負担が大きい部分である。現状では、地域全体では、林地未利用材の1/3程度の利用に留まるが、総合振興局では、路網整備により集荷・搬出拠点を設けてコスト削減を模索しており、より経済性が高まる可能性がある。

また、国交省北見河川事務所が実施している「公募型樹木伐採事業」もエネルギー資源としての利用を展望している。河川内樹木は洪水を引き起こすことから伐採する必要があるが、これを民間企業が実施する。現在は、地元企業のエース・クリーン社が、この資源を用いた家畜飼料製造を行っている。

さらに、この地域では、畜産系バイオマス資源も豊富である。湧別町では、この全町的な活用を計画している。これまでは、堆肥として利用してきた家畜排泄物を用い、町営で発電を行うことで、売電に加え、公共施設や一般家庭への電力供給体制を整える。さらに、余剰熱を利用した農業などとの連携も可能となる。バイオマス資源の活用が、地域の各経済主体の連携を生み出すことが事業のポイントである。



発電タービンの説明を受ける（WIND-SMILE）

学 生 研 修 記

井手 麻由佳

経済学科2年
藤女子高校出身



加藤 亮

経済学科3年
札幌静修高校出身



公営堆肥化施設の今後

今回私たちは、さまざまなバイオマス関連施設を訪ねました。事前学習ではわからない現地の様子を自分たちの目で感じる事ができた貴重な体験でした。

私が今回訪れた中で特に注目したのが留辺蘂花園堆肥センターです。事前学習で畜産廃棄物処理について学んだことも理由の一つではありますが、事業が2022年3月で終了してしまうというのが大きな理由です。同施設では、家庭からでた生ゴミや下水道処理センターで発生した汚泥を堆肥にする事業を行っていました。一般的な自治体であれば、燃やせるゴミなどで処分されますが、堆肥化することで住民に無料配布する有意義なシステムであるといえます。しかし、このような事業が経費などの問題で終了してしまうのはとても残念であると思います。他の自治体でも同じような理由で事業終了がしないように自治体間の協力も必要であると感じました。

「脱炭素」時代の地方の可能性

今回の地域研修では、北見市・網走市を訪れ、豊富に存在する木材資源をエネルギーや肥料へと転換している様子、そして家庭ゴミや家畜の糞をリサイクルして有効活用する様子を見ることが出来ました。主要な資源を有効活用するのは勿論のこと、本来捨てられるものまで活用している事が、「持続可能性」が重要視されている現代の情勢にとっても合っているように感じました。また、湧別町役場の方とのオンラインヒアリングの中で、バイオマスエネルギーの循環利用や、周辺地域と協力した地域発電会社の設立についての構想を聞くことが出来ました。

最近では「脱炭素」という言葉をよく聞くようになり、石油中心のエネルギー産業が見直され、地域資源を活用したエネルギーに注目が集まっています。こうした流れは、地域資源が豊富な地域、一次産業が盛んな地域にとって追い風になるのではないかと感じました。

2部 浅妻裕ゼミⅠ・Ⅱ

参加学生数8名



浅妻 裕

経済学科
教授



被災地ツアーにて

厚真町における震災復興の現在地

研修地：厚真町

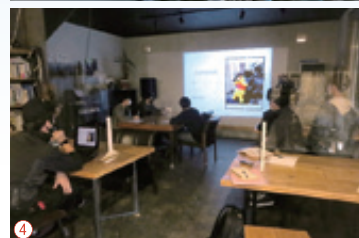
●研修目的

胆振東部地震で甚大な被害を受けた厚真町では、発電や資源循環を地域産業化した経済復興を目指している。同時に、ローカルベンチャーのユニークな活動が幅広く見られ、復興にも寄与している。震災から3年たった厚真町経済の現在地を確認する。

研修先・日程

10月25日 厚真町産業経済課 宮久史様(厚真町役場、現地見学)
株式会社エーゼロ厚真 花屋雅貴様(コミュニティスペース「イチカラ」にて)
マドラー株式会社 成田智哉様(コミュニティスペース「イチカラ」にて)
10月26日 厚真町観光協会による被災地ツアー(田中克幸様)
「馬鉄の道」エクスカーション
道の駅あびら視察

写真①ソーラーパネル設置箇所にて。②発電設備設置予定地に説明を受ける。③コミュニティスペース「イチカラ」前にて記念撮影。④「イチカラ」にて、講演を聞く。⑤地すべりの跡地。⑥被災地植栽現場にて。⑦「馬鉄の道」跡地付近にて。



●総括

今回の研修では、以下の3点を学ぶことが出来た。

1点目は、「エネルギー六次産業化プロジェクト」が着実に進行していることである。このプロジェクトは、ブラックアウトなど非常時の給電体制を整えること、さらにこの体制整備自体を地域産業化することを目的とし、太陽光パネル・蓄電池・木質バイオマス発電を連動させたエネルギーの地産地消を目指している。さらに、排熱を地域農業に利用する産業連関創出も企図している。

2点目は、厚真町では2016年から移住起業支援「ローカルベンチャースクール」の取り組みが行われており、地域でチャレンジしたい人々を多く迎え入れていることである。「エーゼロ厚真」は、そのローカルベンチャーと地域をつなぐ「土壌」となっている。人口が4,500人と少ない分、それぞれの起業家の活躍のインパクトは大きく、そのインパクトを効果的に情報発信している。結果的に、チャレンジャーの周りにチャレンジャーが集まるという好循環を生んでいる。

最後に、現地ツアーにて、大規模な土砂崩れの現場やその復興状況を確認できたことである。人の手で植栽を進める箇所、自然回復を目指す箇所などが分かれている。

学生研修記



西村 知紘

経済学科2年
札幌光星高校出身

復興のその先にあるもの

初日は厚真町役場で震災時の電源事情などのリアルなお話を伺った。当時、パソコン・プリンタが動かせず、情報共有に支障をきたしたとのお話があり、地域で電源を持つ必要性が分かった。現場調査にも行き、太陽光パネルの設置や機材の敷設が進められていた。「イチカラ」での講演では、厚真町が、人と人の結びつきを大事にしながら起業家を育てていることもわかった。

被災地ツアーでは、胆振東部地震の被害を目の当たりにした。事前学習時は、厚真町は、未だに「復興途上」で、そこだけを見据えた経済活動を行っているのではないかと考えていたが、実際に現地足を運んでみると、厚真町に住む人々は既に復興のその先を見ていて厚真町産業の基盤の形成を目指していることがわかった。



亀田 真生

経済学科3年
旭川実業高校出身

熱い思いの人が集うまち

震災復興の現状と課題について、ローカルベンチャー、エネルギー六次産業化をキーワードに研修を実施した。

一日目は厚真町の概要や震災後の対策や課題、震災木を使用したバイオマス発電、ローカルベンチャースクールの話を伺った。ローカルベンチャースクールの話を聞き、厚真町で何かをしたいという熱い思いの人たちが集まり、厚真町を盛り上げていることがわかった。二日目は実際に被災地を訪れて、ガイドの方から震災が起きた状況やどれくらいの規模の震災だったのかという話を聞いた。被災地へ移動する際、バスの中でガイドの方が山崩れの起きた場所を指さし、あの規模の山崩れが厚真町で6000か所あったと言われ、本当に大規模な地震であったのだと実感した。同時に、復興には震災前から実施している取り組みが大きな役割を果たしていることも分かった。

現地に行って初めて知ることが多い有意義な研修になった。



1部・2部 上園昌武ゼミ

参加学生数15名



上園 昌武

経済学科
教授



ゼミ室にて

町政と地域づくりー産業・観光・生活

研修地：豊富町

●研修目的

本研修の目的は、農山村の豊富町での地域づくりについて、現場で奮闘する住民や行政職員、事業者などの姿を通じ、より深く掘り下げて考察していくことである。また、事前学習からゼミ生同士で協働作業を行うことによって共同研究の醍醐味を知ることを目指している。

研修先・日程

現地研修・調査なし

写真①サロベツ湿原の細道。②サロベツ湿原での泥炭採掘船。③④⑤⑥報告作成の様子。



●総括

今年度は、北海道豊富町にて1・2部合同で地域研修を行なった。当初は、9月14～16日の2泊3日で現地調査を行う予定であったが、コロナ渦の影響で残念ながら中止となった。その代替措置として、9月15日にZoomを用いて、町長の講話と役場担当者による学生からの質問への説明が行われた。現地を訪問できなかったため、学生たちには報告のとりまとめで相当苦勞を強いたが、無事に報告書の作成と12月18日の地域研修報告会でプレゼンを行うことができた。また、12月11日には、他大学との合同ゼミでも報告を行い、研究交流を果たすことができた。しかしながら、学生たちにはフィールド調査の難しさを感じたかもしれないが、楽しさを味わうことができなかったと思う。不可抗力とはいえ、残念としか言い様がない。

豊富町は、酪農とサロベツ湿原を特徴とした雄大な自然の町である。また、豊富温泉は世界でも珍しく油分を含んでおり、皮膚病の湯治場としても知られている。一方で、過疎地に共通した問題にも直面しており、教育、地域交通、買い物難民、移住定住促進への取り組みが大きな課題である。来年度は、産業・観光・生活をテーマに勉強を進めて現地調査を実施したい。



オンラインによる町長講話を聞く

学 生 研 修 記

豊富町の豊富な地域資源



中島 佳哉

経済学科2年
岩見沢東高校出身

今回の研修は実際に現地を訪れることができませんでしたが、自分たちなりに調べたり、オンラインで豊富町の町長や職員に方のお話を聞いたりして情報を収集しました。その中で特に印象的だったのは豊富町ならではの多様な地域資源です。基幹産業である酪農をはじめ、サロベツ原野や油分を含み湯治に多くの人々が訪れる豊富温泉など、独自性のある資源は町の大きな強みの一つだと感じました。また、豊富町がこれらを活かして町の発展を図るだけでなく、町が抱える問題を解決するために様々な施策を講じていることが分かりました。

実際に目にすることができなかった町の取り組みや豊かな自然を機会があればぜひ見てみたいです。

豊富町は魅力的！

今回直接豊富町へ行き、研修を行うということではできませんでしたが、豊富町について様々なことを調べて感じたのは、人口が多くなく小さな町だけれど魅力を感じる部分が多いということです。日本に一つしかない石油の成分を含んだ温泉や、北海道民ならほとんどの方が知っている豊富町の牛乳は、ほかの地域に自信をもって誇れるものだとは思いました。ほかにも多くの魅力を持った豊富町が多くの人に知れ渡り、もっと大きな町に発展することを望んでいます！



小川 大輝

2部経済学科2年
滝川高校出身



1部 内田和浩ゼミⅠ・Ⅱ

参加学生数11名



内田 和浩

地域経済学科
教授



ゼミ室にて

恵庭市の「花」「農」「子育て」とまちづくり

研修地：恵庭市

●研修目的

本地域研修は、恵庭市のまちづくりの実態を理解することを目的に行なう。当初は、前期のゼミナールⅠ・Ⅱで学んだ量的調査法によって、恵庭市のまちづくりの取り組みに対する住民意識調査を行うための調査票づくりに役立てるが目的だった。しかし、コロナ禍で夏休み期間中の2泊3日の地域研修が中止となり、12月1日に1日だけの日帰り研修を実施した。

研修先・日程

12月1日 「えにあす」(市民活動センター・図書館分館) 見学
直売所「かのな」及び「はなふる」 見学
恵み野地区(花のまちづくりの取り組み)のフィールドワーク
恵庭市立図書館見学
恵庭小学校通学舎学生会場見学(バスの中から)

写真①子育て支援のまちづくりグループ。②えにあす内の図書館分館。③農のまちづくりグループ(直売所かのな)。④花の拠点ははなふる。⑤花のまちづくりグループ。⑥恵み野地区の花さんぽ。⑦恵庭市立図書館。



●総括

前期のゼミナールでは、「量的調査法の基礎」を学ぶとともに、新聞記事から恵庭市のまちづくりについて紹介しあい、その主たる政策は、「花のまちづくり」「農のまちづくり」「子育て支援のまちづくり」であることが明らかになっていった。そこで地域研修では、恵庭市の関係者からそれぞれのまちづくりの取り組みについて、詳しくお話を聞くとともに、拠点となる施設の見学を行うこととした。そして、後期には地域研修を踏まえて、アンケート調査票を作成し、市民がどれだけそのようなまちづくり政策を理解し、参加しているかを分析して行こうと考えた。

しかし、地域研修を計画した夏休みの期間は、まん延防止等重点措置期間、そして緊急事態宣言期間と重なってしまい中止となってしまった。したがって、後期のゼミナールでのアンケート調査票づくりは、地域研修での現場見学や詳しいお話を聞かないままでの作成となった。アンケート自体は、恵庭市内の2つの小・中学校の協力を得て、約1300人のPTA会員へ配布することができた。その後、アンケートデータの集計と分析を進め、「花のまちづくり」「農のまちづくり」「子育て支援のまちづくり」のそれぞれについて、市民の認知度や関心度を明らかにすることができた。

お世話になった皆さんに感謝したい。

学生研修記

八重樫 優里

地域経済学科2年
名寄高校出身



恵庭市の地域研修を終えて

私たち内田ゼミは、12月1日に恵庭市で地域研修を行いました。図書館・道の駅・直売所など、事前学習で調べた施設を見学しました。見学した施設は、平日であるのにも関わらず、どこも多くの方が利用していました。

私たちのグループは、直売所「かのな」で店長さんからお話を伺いました。利用している層が平日と休日で大きく違うこと、新鮮な野菜を仕入れるための物流システムについて、コンビニを利用した野菜の販売、売れ残った野菜を売り切るための工夫など、自分たちで調べただけでは分からないような貴重なお話を沢山聞くことができました。また、卵・野菜・花など恵庭の特産品や特産品を使った加工品が多く揃えられており、地産地消に力を入れていることが分かりました。今回の地域研修で、知識しかなかった恵庭市を体験として知ることができ、とても楽しく充実した研修となりました。

丸藤 和輝

地域経済学科3年
北海高校出身



地域研修を終えて

私たち内田ゼミⅠ・Ⅱでは、12月1日に日帰りで恵庭市を訪問し、地域研修を行いました。

昨年は沼田町で、町の中心人物に今までの取り組みや今後の政策の方針などをお聞きするインタビュー調査でしたが、今年は恵庭市の花・農業・子育て支援のまちづくりという三つの観点でアンケート調査を実施しました。その結果、私たちが知識として認識していたことと、実際に住民が住んで思っていることが乖離していることがわかりました。

一例として、私たちが調べた際に花のまちづくりにおいて「はなふる」という施設は重要な拠点であり、恵庭市では数多くのイベントが行われているという理解をしていました。しかし、住民にとってはこういった認識はなく、一部では何が行われているのか知らないという回答もありました。

今回の調査から、文面の理解で研究を進めず、実際の声を聞くことの大切さを学びました。

2部 内田和浩ゼミⅠ・Ⅱ

参加学生数6名



内田 和浩

地域経済学科
教授



本学にて

函館市のまちづくりの課題を学ぶ

研修地：函館市（リモートで実施）

●研修目的

本地域研修では、前期のゼミナールⅠ・Ⅱで学んだ量的調査法によって、函館市の市立函館高校の生徒を対象にした進路やまちづくりに関する意識調査を行うとともに、函館市のまちづくりの課題について学ぶ。

研修先・日程

2月3日 函館旧市街地（歴史的景観保存地域）のまちづくりの現状と課題講話～山本真也氏（函館元町倶楽部・前函館市教育委員会教育長）
学生と山本氏との意見交換

写真①②③山本さんの講話。④山本さんとの意見交換。⑤ゼミ全体写真。



●総括

前期のゼミナールでは、「量的調査法の基礎」を学ぶとともに、新聞記事から函館市のまちづくりの現状について紹介しあい、資料から函館市のまちづくりの課題を把握した。その中で、近年の人口の大幅減少や若者の雇用問題、高齢化の問題が明らかになってきた。そこで地域研修では、アンケート調査や聞き取り調査を通じて函館市の高校生と高齢者の函館に対する意識を知ろうと考えた。そして、後期には地域研修を踏まえて、アンケート調査票を分析して行こうと考えていた。

しかし、地域研修を計画した夏休みの期間は、まん延防止等重点措置期間、そして緊急事態宣言期間と重なってしまい、2月に延期することとなった。

したがって、後期のゼミナールでアンケート調査票をつくり、市立函館高校2年生には郵送による調査をお願いし、209人から調査票を回収することができた。高齢者からは、残念ながらアンケート調査はできなかった。

その後、アンケートデータの集計と分析を進め、高校生の進路問題や将来函館へのUターンの可能性、函館港まつりへの関心度を明らかにすることができた。

一方、延期して2月2日～4日に函館で実施する予定だった地域研修は、再びまん延防止等重点措置の期間と重なってしまい、函館へは行けずリモートでの実施となった。

お世話になった皆さんに感謝したい。



山本さんの講話

学生研修記

地域研修を終えて

今年度の内田ゼミは、新型コロナウイルスの影響もあり、当初予定していた現地での研修を行うことが出来ず、オンライン（zoom）での活動になりました。主な内容としては、前函館市教育委員会教育長である山本真也さんに、函館市のまちづくりについての講話を頂きました。

特に印象的だったのは、若い人が函館市の魅力に気づかず函館市から出て行っているのではないかと、若者たちが函館市に戻るに帰れないという状況があり、具体的には、就職先が少ないこと、地価が高いことから住むことが出来ないといった事を挙げられていました。

今回の地域研修とゼミで行った市立函館高校の二年生へのアンケートの結果から、函館市の若者の流出が多いということについて、今後その解決策について考えていきたいと思います。

地域研修について

今年度内田ゼミでは、コロナウイルスによる影響を強く受け、結果、直接現地を訪問する地域研修は中止を余儀なくされた。その代わりに、函館元町倶楽部・前函館市教育委員会教育長である山本真也氏による講話の機会をzoomにて設けていただいた。

私は、函館市について詳しいわけではなく、訪れたのも小学生の時に一度だけでしたので、山本氏のお話には学びが多く、私の知らなかった函館市の魅力や市民活動、イベント等について新たに知ることができ、是非訪れたいと感じたのと同時に、改めて地域研修が中止になったことを非常に無念に思う。

なお我々は、地域研修で函館へ行くことを前提に市立函館高校の2年生へアンケート調査を行い分析してきたが、その内容だけでは得られない情報をこの講話で得ることができ、研修へ行けない分最低限の経験をする事ができてよかった。

今後学生のうちに、函館以外にも研修の機会に限らず訪れたいと思う。



泉 享佑

地域経済学科2年
市立函館高校出身



福田 大貴

地域経済学科2年
旭川永嶺高校出身

1部 大貝健二ゼミ

参加学生数8名



大貝 健二

地域経済学科
准教授



旧広尾線幸福駅で

十勝地域における地域経済プラットフォームの形成

研修地：帯広市・音更町・本別町・芽室町

●研修目的

本研修では、2010年代前半に地域経済の活性化に向けて小麦の生産、加工、消費のリンケージを形成してきた企業のその後の展開について捕捉すること、さらに近年形成されつつある、起業プラットフォームの動向も学ぶこと、この2点を目的とした。

研修先・日程

10月19日	前田農産食品株式会社
10月20日	株式会社山忠HD 株式会社満寿屋商店 株式会社そら
10月21日	公益財団法人とかち財団 めむるワイナリー 株式会社尾藤農産
10月22日	現地研修報告会（オンライン）

写真①②前田農産食品。③山忠HD。④満寿屋「麦音」。⑤とかち財団。⑥とかち財団のスタートアップ支援カフェスペースLAND。⑦豚井（大盛）。



●総括

本研修で明らかになったのは、次の点である。

第1に、小麦のリンケージ形成を担っている農業経営者に関しては、農業の持続性に向けた取り組みが実践されていた。例えば、前田農産食品では、農業雇用を増やすために通年雇用を実現しているほか、6次産業化の品目をポップコーンにも広げていること、尾藤農産では、魅力ある農業として事業承継を進めているほか、新たにワイン用ブドウの生産、共同出資によるワイナリーの設立があった。

第2に、製粉を担う山忠HDでは、小麦の出口戦略として、大都市圏をマーケットとして飲食店事業をFCによって展開しているほか、地域の担い手として経済活性化に向けた起業家育成支援のほか地域福祉にも事業範囲を拡大している。また、満寿屋商店では、2030年十勝パン王国構想を掲げ、十勝ならではのパン作りを追求していた。

第3に、近年十勝では起業支援が熱を帯びているが、十勝財団、株式会社コントレイル（株式会社そらと山忠HDの共同出資による企業）が、それぞれの強みを活かした共創型起業支援を展開していることがわかった。地域の魅力をいかんなく活用し、地域内総生産を引き上げようとする取り組みであった。

学 生 研 修 記

佐藤 平

地域経済学科 2年
北広島高校出身



安田 麻優

地域経済学科 2年
札幌第一高校出身



地域研修を通じて見えたもの

今回の十勝地方への地域研修を経て感じたことは、ここに記すには足りないほど多い。しかし、私の目に最も印象深く映ったのは、自らが携わる事業における特有の課題や問題を、自らの経験や豊かなアイデアを駆使して乗り越え、未来へのビジョンを力強く描いている事業者たちの姿だ。農業の持続性をいかに実現するのか。地域経済を発展せしめる雇用をいかにして生み出すのか。普段レジュメや授業動画を通して私たちのもとに向かってくるような地域や業界の課題を、彼らは全身で必死に受け止め、克服しようとしていた。その上で、事業の発展や業界全体の活性化といった未来像の実現に向けて行動していたのである。その一環を、フィールドワークを通じて学べたことは、私にとってかけがえのない価値があったと確信できる。今回得られたことを、ぜひとも今後の学びに活かしていきたいと思う。

地域研修を終えて

地域研修で訪問した企業は、いずれも「十勝のためになる事をしたい」をコンセプトにした取り組みを各々行っていた。そのなかで、企業間連携のあり方や、私的な利益を追求する企業とは一味違った企業を知ることができた。企業の取り組みが地域にどのように影響するか、農業を持続的に発展させるために何をすべきかなど、地域経済を学ぶ上で必要な分野について学ぶこともできた。訪問した企業の方たちが十勝の経済の状況をしっかりと把握している様子を見て、自分自身も地域研修に行く前に訪問先の企業の情報を調べるだけではなく、十勝がどのような場所なのか、他の地域と比べて何が強みなのかなど、地域の経済状況について把握した状態で行くべきだったと反省した。来年は今年の実省を生かして入念に準備し、自分からさらに企業の方たちと話を展開できるようにしたい。

1部 大貝健二ゼミⅡ

参加学生数 10名



大貝 健二

地域経済学科
准教授



ゼミ室で

宮城県酒造業界の独自の展開を学ぶ

研修地：宮城県仙台市・大崎市・加美町・気仙沼市

●研修目的

本研修では、全国の清酒製造業のなかでもいち早く特定名称酒の生産割合を高めてきた宮城県の清酒製造業に着目した。その軌跡を学ぶこと、さらには東日本大震災が酒造業界に与えたインパクトを与えたのか、市場や技術の変化を中心に学ぶことにした。

研修先・日程

10月25日	宮城県酒造組合
10月26日	(株)一ノ蔵 (株)寒梅酒造(宮寒梅) (株)田中酒造店(真鶴) (株)中男酒造店(天上夢幻) (株)男山本店(男山、蒼天伝) (株)角星(水鳥記)
10月27日	東日本大震災遺構
10月28日	八葉水産

写真①一ノ蔵。②③寒梅酒造。④⑤気仙沼男山。⑥角星。⑦東日本震災遺構。



●総括

本研修の成果は以下のとおりである。第1に、宮城県では全国大手の酒造企業との価格競争から脱却するため、1986年に「みやぎ・純米酒の県宣言」を行い、県内酒蔵での特定名称酒比率を引き上げてきたことである。この取り組みが、大手との差別化となり、宮城県の酒を全国に知らしめることになった。第2に、東日本大震災の影響である。タンクが倒壊した、蔵が全壊した、電源喪失したために酒造りの温度管理が不可能になったなど、被害について学ぶ一方で、全国からの「飲んで応援」特需ともいうべき状況が、新たな販路開拓につながったという話もうかがえた。実際に宮城県の酒造業界は県内消費が7割以上だったが、震災以降は県外比率が徐々に高まっている。また、震災を契機に、南部杜氏から蔵元杜氏、あるいは社員杜氏へと転換が進んだことにより、酒造りのコンセプトをダイレクトに示せるようになったという動きもあった。

本来は、北海道の酒造業界を中心に新たな展開を捕捉する予定だった。しかし、コロナに翻弄され、統計分析でも特異な動きが明確だった宮城県に焦点を当てることになったが、訪問先のご厚意もあり、非常に学びの多い研修となった。

学生研修記



小林 由和
地域経済学科3年
札幌東陵高校出身

学術研究だけではない地域研修

本研修は、北海道の清酒業に寄与するべく、全国と比べて特定名称酒割合が高い（もちろん他にも理由はあるが割愛させていただく）宮城県に訪問した。

社会情勢もあって、飛行機の座席を取ってから蔵元にアポを取るという、退路を自ら断つような試みもした。

現地での研修は3泊4日で宮城県酒造組合と6つの蔵元にヒアリングをした。明らかになったことは、宮城県の清酒業を捉える上で重要なキーワード、「みやぎ・純米酒の県宣言」と「東日本大震災」である。前者は、宮城県が特定名称酒割合を高める動きの発端であることがわかり、後者は、今もなお、質の高い清酒が造り続けられていることの、一つの重要な要因である。

ところで、本研修で最も心を動かしたのは東日本大震災遺構に訪れた事である。日本に生きる人間として、実際にみて、感じることは、何事にも代え難い経験となった。



二村 奈津子
地域経済学科3年
北海学園札幌高校出身

日本酒について学んだ地域研修

私たちは日本酒の研究をし、宮城へ日本酒のことについて地域研修を行いました。なぜ宮城県を選んだかというと日本酒について調べていくうちに、課税移出数量や特定名称酒の割合が全国と比べると高いことに気づきました。宮城県はほかの県と違う取り組みや動きをしているのではないかと思います、研修先を宮城県に決定し、いくつか企業を訪問しました。

訪問先では特定名称酒の生産割合増加のきっかけや、東日本大震災が酒造業界に与えた影響、「みやぎ・純米酒宣言」について、新型コロナウイルスの影響による売り上げの変化などを知ることができました。また、日本酒に触れる機会が減っている現状や、新たな市場を生み出すことがこれからの課題になっていくことがわかりました。



2部 大貝健二ゼミⅡ

参加学生数4名



大貝 健二

地域経済学科
准教授



道の駅きこないにて

ミッションコア企業の可能性を探る

研修地：函館市・木古内町

●研修目的

大貝ゼミでは、「地域経済の活性化」とは何かを追究している。今年度はその役割を担うミッションコア企業（「こうあったらいいと思う地域のイメージ」をゴールにして事業を展開している企業）にスポットを当て、地域密着の事業展開を学ぶことを目的とした。

研修先・日程

10月12日	キョーツー株式会社 相互交通株式会社
10月13日	株式会社サンライト 株式会社K.Depart 株式会社五島軒
10月14日	株式会社 函館フーズプランニング 有限会社ホテルテトラ
10月15日	現地報告会（北海道中小企業家同友会 函館支部）

写真①キョーツー株式会社。②相互交通株式会社。
③サンライトの水耕栽培施設。④サンライトでのヒアリング。⑤五島軒。⑥函館フーズプランニング。⑦函館ベイエリアのハセガワストアとラッキビエロ。⑧ホテルテトラのマスコット。



●総括

本研修で明らかになった点は以下のとおりである。

第1に、地域の人たちのことを第一に考え、大事にしていることがわかった。例えば、相互交通株式会社（タクシー会社）は、徹底的に地域住民に寄り添ったサービスを展開していた。また、小学校の下校時に児童たちの安心・安全を守る目的から、意識的に通学路周辺を走っている興味深い取り組みもあった。

第2に、地域資源を活用し、中小企業ならではのつながりを創り出そうとしていることである。木古内でレストランとパン屋事業を展開している株式会社K.Departでは、多くの地域の生産者とながら、商品開発に結びつけていること、さらに函館の老舗企業である株式会社五島軒も、周辺自治体の資源を活用したレトルトカレーを開発するなど、地域の魅力を引き立たせる連携を展開していた。

第3に、新型コロナウイルス感染症に関する影響も訊くことができた。函館経済が観光で潤っていた分、コロナのインパクトが大きいことが指摘された。また、飲食関連事業を中心に、地域内で横のつながりを創り出そうとする試みや新たな需要開拓への意気込みが多く聞かれた。

学生研修記

島田 悟紀

地域経済学科 2年
俱知安高校出身



大貝ゼミ地域研修記

私たち、大貝ゼミは地域のためになることをビジネスに昇華している企業、つまりミッションコア企業に訪問させて頂きました。訪問地域は函館で、函館市全体で見たときの傾向や課題を感じることができ、とても面白かったです。僕が感じた傾向として、自社の利益を優先しているのではなく地域住民の生活を第一にしている企業が多く、なかでも五島軒の若山さんによる「我々は商人ではない、経営のロマンチスト」という発言は特に印象的でした。

今後の課題は、観光資源の多さを活かしてきていない、把握できていない点と聞けました。地元はどうか、良さを認識できているのか、と考えさせられました。

訪問中も無音状態がないくらいお話をきいたり、質問することができました。研修から帰ってきた今でもみんなで研修中の時のことを話しています。本当に楽しい地域研修になりました。

地域研修を終えて

今回の地域研修では、地域のためになることをビジネスとして展開している「ミッション・コア企業」というのに着目し、函館でヒアリング調査を行いました。

7社の企業を訪問した結果、明らかになったことは、徹底的に地域に密着して事業を展開していること、地域の特徴を踏まえた上で、それに則したサービスを提供していること、利用者、生産者、中小企業同友会とのつながり、コミュニケーションをとっても大事にしていることです。大手企業にはできない、中小企業ならではの取り組みや地域に合った細やかなサービスが多く、中小企業の地域経済における重要性を感じました。

どの企業でも興味深いお話ばかりで、ヒアリング中は驚きと興奮が止まりませんでした。報告会の発表時間では伝えきれないほどの成果を得ることで、とても充実した地域研修となりました。

1部・2部 川村雅則ゼミⅠ・Ⅱ・Ⅲ

参加学生数 1部19名・2部13名



川村 雅則

経済学科
教授



インゼミ大会無事終了

新型コロナウイルス禍の下での学生アルバイト等 コロナ下における看護労働

研修地：札幌市

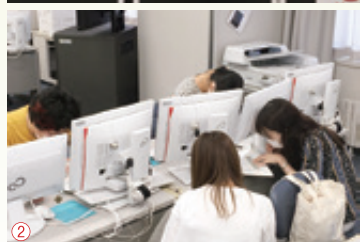
●研修目的

昨年度に引き続き、コロナ下における学生アルバイト等の現状把握につとめた。コロナ感染拡大によるアルバイトへの影響が長期化していること、緊急事態宣言が解除されても就業機会が回復・安定しないこと、業種による差が大きいことなどを念頭において調査を行った。

研修先・日程

前期	コロナ・パンデミック下の雇用や生活保障のあり方について学ぶ。 昨年度中止になった日本学生経済ゼミナール大会（以下、インゼミ大会）が、今年度はオンラインで開催されることになったので、1部ゼミⅡは2グループに分かれて研究テーマの検討を開始（注）。 残りの1部ゼミⅠと2部ゼミは、昨年度に引き続き、コロナ下における学生アルバイトでの経験、学費負担や奨学金利用、経済状況や生活全般（以下、学生アルバイト等）の調査の準備に取りかかる。調査後の活動を視野に入れて、今年度は7月に前倒しで調査を実施。
夏季休暇	「北海学園大学 学生アルバイト白書2021」（以下、「白書」）の作成に着手。
後期	「白書」の暫定版を作成した後、コンテンツ作りのほか、大学との懇談の準備に取り組む。 ゼミⅡは、インゼミ大会に参加して法政大学のゼミと討論（12月4日）。 「白書」、コンテンツ、インゼミ大会の論文は、ウェブサイト（北海道労働情報NAVI）上で公開。

注：最終的に、第1グループは学生アルバイトに関する詳細調査聞き取りを行い、第2グループは、労働組合のご協力を得てコロナ下における看護職の労働実態聞き取り調査で明らかにした。いずれも紙幅の都合で省略する。



●総括

(1) 今年度もウェブ上でアンケート調査を実施した。本学に在籍する学生およそ8千人近くに配信を行い、696人（1部500人、2部196人）から有効回答を得た。ウェブ環境が整備された者に回答が偏っている可能性も念頭におきながらみていく（詳細は『白書』を参照されたい）。

(2) アルバイト就業：コロナ下で勤務シフト・勤務時間数の減少を多くの学生が経験していた（図表1）。「勤務シフト・労働時間が減った」、「勤務シフト・労働時間がゼロになる期間があった」、「バイト先が休業することがあった」など、勤務の減少（ゼロを含む）が広く経験されており、三ついずれかの項目に回答した者（勤務が減ったかゼロを経験した者）は、重複を除くと46.6%（1部では49.7%、2部では39.4%）である。

学生アルバイトの二大業種である「飲食店」と「小売店」で働く者のそれぞれに焦点をあててみた。やはりというべきか、コロナの影響を大きく受けている者は「飲食店」群で多かった。緊急事態宣言下（2021年5,6月）での勤務量の変化を尋ねたところ（図表2）、「小売店」群では「変化していない」が71.1%であるのに対して、「飲食店」群では「ゼロになった」が18.6%、「減った」が48.3%であった。

勤務の減少は広く確認されたが、にも関わらず、休業手当が支給されていなかった。勤務の減少を経験した者に対して休業手当が支給されたかを尋ねたが（図表3）、半数は、「とくに何も支給されなかった」と回答している。

今回は、ワークルールの認知・理解状況についても調べてみた（図表4・5）。条件を満たせば学生アルバイトでも有給休暇を使うことができることを知っている者は4分の3に及んだものの、自分の現在のアルバイト先で学生アルバイトが有給休暇を使うことができるかどうかは「わからない」が44.6%で、15.6%は「できない」と回答している。また休業手当については、(a) 学生アルバイトでも休業手当が支給されることは「知っていた」が6割強であるが、(b) 労働基準法上、休業手当は平均賃金の6割以上が支給される必要があることについては、「知っていた」は47.9%にまで低下し、(c) お店が完全に休業

学生研修記



佐藤 美緒
経済学科 2年
大麻高校出身

アルバイト白書を作成し学んだこと

私たちのゼミでは、コロナ禍での学生のアルバイト事情などを明らかにするためにアンケート調査を行い、調査結果に基づきアルバイト白書を作成しました。昨年度行われた調査と大きな違いは、業種によるコロナの影響や働き方の違いに着目した設問や、休業手当制度の認知度や手当の支給状況を聞く設問を設置したことです。

調査の結果は、学生の多くが働く小売店と飲食店で影響が大きいことが分かりました。特に飲食店では、緊急事態宣言等が影響してシフトが減る又は無くなったという学生が多く見受けられました。休業手当については、正しい知識を持っていない学生が多いことや、休業手当を十分に受け取っていない学生がとて多いことが明らかとなりました。調査を通して、正しい知識を身に付けることの大切さを学びました。そして、それを発信していくことも重要なのだと思います。



八谷 竜暉
経済学科 2年
知内高校出身

地域研修を振り返って

今回の地域研修では、北海学園生にアルバイトに関することについてアンケート調査を行いました。特にコロナ禍以前と以後でのアルバイトの労働時間の変化や給料の変化、休業手当はしっかり支払われているかなどの項目を設けました。ゼミのメンバーと一緒に調査結果をまとめるにあたっては、コロナ感染予防ということで、直接顔を合わせて作業することに苦労しました。そんな中でもしっかりとアンケート調査の結果をまとめることができました。

今回のアンケート結果で、最も目を引いたのが、休業手当の認知度についてでした。休業手当の仕組みをしっかり理解している学生の割合が低かったのです。

今回の地域研修を終え、私は、北海学園生をはじめとした大学生にもっと休業手当など働く際のルールを広めていくべきだと感じました。

図表1 2020年度のアルバイトでの経験（求職活動経験も含む）【複数回答可】

合計【単位：人・％】	464 100.0
勤務シフト・労働時間が減った	177 38.1
勤務シフト・労働時間が減った	97 20.9
バイト先を解雇された	14 3.0
バイト先が休業することがあった	124 26.7
バイト先の廃業・閉店を経験した	21 4.5
自分が希望するだけの労働時間数を働くことができなかった	109 23.5
コロナ感染をおそれてアルバイトをひかえた	62 13.4
コロナ感染をおそれてアルバイトを辞めた	15 3.2
仕事を探したが、見つけるのに苦労した	72 15.5
仕事を探したが、最後まで見つけれなかった	23 5.0
コロナで仕事が逆に忙しくなった	44 9.5
収入を増やすため労働時間数や仕事・アルバイト先を増やした	56 12.1
とくに問題はなく、安定的に働くことができた	153 33.0
（無回答）	3 0.6

したり1日単位での休業の場合だけでなく、勤務時間が短縮されるような場合でも休業手当が支給されることを知っていたかという質問への回答は、4割弱にまでさらに低下した。より実践的なワークルール教育の必要性が示唆される。

（3）経済的な状況や心身の状況：コロナ禍の長期化で学生たちのメンタル状況が懸念される。

図表6は、経済的な状況や心身の状況のうち「大学で友人ができない」、「サークル活動や部活動に入り損ねた」、「大学生生活がつまらない」の割合を取り上げたものであるが、1部でも2部でも「2年生」の結果がよくない。大学生生活2年間でコロナで制約を受けていることの反映と推測される。

図表7は、コロナ下における収入の減少に対してとった対応策のうち「食費を削った」割合である。実家・親元以外群で食費を削った者が多い。図表は省略するが、本学で開催されている食糧支援について今後も利用を希望する者は1部で26.8%、2部で37.2%と多かった。

（4）調査結果を踏まえた今後の活動について：例年、調査結果を取りまとめてそれで活動を終わらせてしまっていることに疑問を感じたゼミ生たちが、今年度は、調査結果に基づいて何らかのアクションを起こそうと提起して、その賛否を調査で尋ねた。図表8はそのうちの1つで、大学への申し入れを行うべきか尋ねたものである（ほかに、「学習会の開催」、「学内外への周知・広報」、「政治への働きかけ」の実施への賛否を尋ねた）。結果は、実施すべき（強く思う、思う）と多くが回答している。背景には、学費負担への疑問や批判——図表は省略するが、今年度も遠隔授業が中心であるのに対して授業料負担が例年通りであることへの不満（「非常に納得ができない」30.9%、「納得ができない」34.3%）——などがある。『白書』はこちらで公開 → <https://roudou-navi.org/>

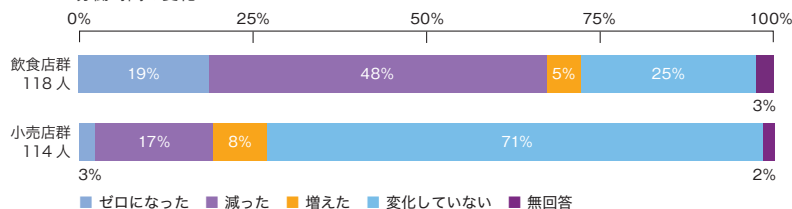
図表4 有給休暇制度に関する認知・理解状況と、自分のアルバイト先での有給休暇制度の利用の可否

合計【単位：人・％】	495 100.0
勤続期間などの条件を満たせば、学生アルバイトでも有給休暇を使うことができることを	
知っていた	371 74.9
知らなかった	113 22.8
有給休暇制度そのものを知らなかった	9 1.2
（無回答）	5 1.0
合計【単位：人・％】	495 100.0
現在のアルバイト先では、学生アルバイトが有給休暇を使うことは	
できる	195 39.4
できない	77 15.6
わからない	221 44.6
（無回答）	2 0.4

図表5 休業手当制度に関する認知・理解状況

合計【単位：人・％】	495 100.0
学生アルバイトでも休業手当が支給されることを	
知っていた	316 63.8
知らなかった	175 35.4
（無回答）	4 0.8
合計【単位：人・％】	495 100.0
労働基準法上、休業手当は平均賃金の6割以上が支給される必要があることを	
知っていた	237 47.9
知らなかった	256 51.7
（無回答）	2 0.4
合計【単位：人・％】	495 100.0
お店が完全に休業したり1日単位での休業の場合だけでなく、勤務時間が短縮されるような場合でも休業手当が支給されることを	
知っていた	190 38.4
知らなかった	302 61.0
（無回答）	3 0.6

図表2 業種（飲食店、小売店）別にみた、緊急事態宣言下（2021年5月16日～6月20日）でのシフト量・労働時間の変化



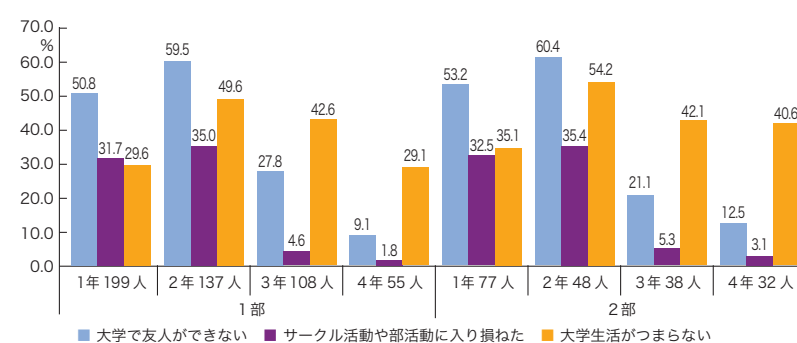
図表3 休業手当が支給されたか【複数回答可】

合計【単位：人・％】	254 100.0
休業手当が支給された	103 40.6
休業手当ではないが、シフト・労働時間の減少に対する手当が支給された	26 10.2
有給休暇の使用で処理された	9 3.5
とくに何も支給されなかった	127 50.0
その他	4 1.6

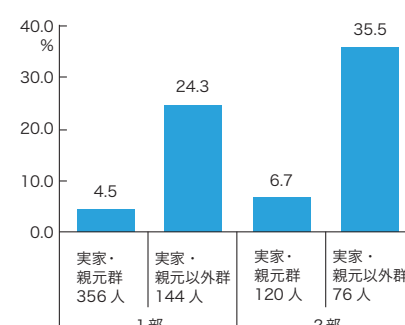


写真①今年の調査内容の検討作業。②アンケート調査結果の取りまとめ作業中。③学生アルバイト白書2021が完成。④今年のインゼミ大会はオンライン開催。⑤パソコン画面の向こうには討論相手のゼミが。

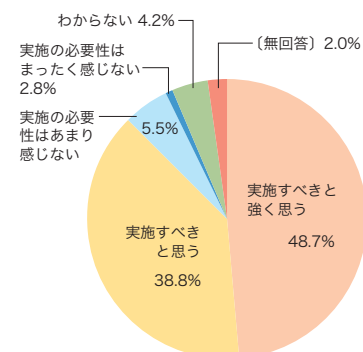
図表6 所属の部×学年別にみた、経済的な状況や心身の状況【複数回答可】のうち、「大学で友人ができない」、「サークル活動や部活動に入り損ねた」、「大学生生活がつまらない」の割合 全体=696人



図表7 所属の部×住まい別にみた、コロナ下における収入の減少に対してとった対応策【複数回答可】のうち「食費を削った」の割合



図表8 調査結果に基づき大学への申し入れを行うべきか 全体=696人



1部 佐藤信ゼミ

参加学生数 11 名



佐藤 信

地域経済学科
教授



コープさっぽろの横澤さんと

コープさっぽろ独自の事業活動を学ぶ

研修地：江別市・札幌市

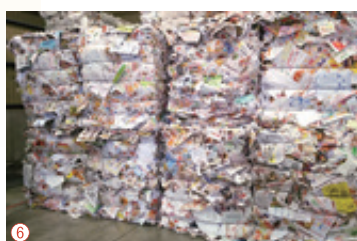
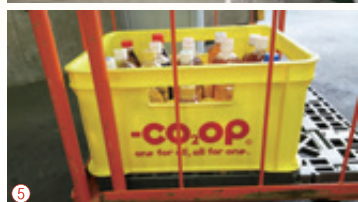
●研修目的

コープさっぽろは事業の効率化を目指して江別市に物流拠点を設置している。また資源回収と再利用のための施設も同市内に存在する。ゼミではこうした施設および店舗視察を通してコープさっぽろのSDGsの目標達成に向けた様々な取り組みを学ぶことにした。

研修先・日程

11月16日 北海道ロジサービス（江別市）
コープさっぽろエコセンター（江別市）
コープさっぽろルーシー店（札幌市）

写真①ロジサービス施設内で説明をうける。②オートストア」自動運転を行っている。③エコステーションで説明を受ける。④回収プラスチックで作った板と川崎センター長。⑤家庭用料理油も回収。⑥宅配ドックのチラシ類も回収。⑦エコセンターのソーラーパネルは北海道環境サミット（2008年）の再利用品。⑧店舗内にあるペットボトル回収器。



●総括

コープさっぽろは創立から50年以上が経過している北海道を活動拠点とした生活協同組合である。新型コロナウイルス感染症拡大の中でのすごもり需要の効果もあり、宅配事業は前年比10%の伸びを示すなどの実績を上げている。他方、2015年に国連で採択されたSDGs(持続可能な開発目標)の実現に向けて、コープさっぽろは、2019年から「SDGs研究会」を開始するなど北海道の地域づくりのための取り組みを強めている。研修では、まずコープさっぽろの物流施設である北海道ロジサービスを訪問した。この施設では自動運転によって作業効率を上げることを可能とした機械設備を始めとする各所を視察した。

次いで、組合員家庭から出される資源(牛乳紙パック、新聞紙、服・靴など)の回収、リサイクルに繋げる事業を行っているエコセンターと併設する教育施設の視察を行った。最後に、コープさっぽろルーシー店を訪問しペットボトルの圧縮機などリサイクル・リユースの取り組み状況を視察した。

地域研修はコロナ禍で当初の日程を2か月遅らせて実施した。受入ができない関連施設もある中で、視察の対応ならびに日程調整して下さった関係の方々に深く感謝いたします。

学生研修記

持続可能な社会に向けて

私達は、江別市にあるコープさっぽろエコセンターと札幌ロジセンターを視察しました。エコセンターは、コープさっぽろの物流網を利用して資源を回収・加工し、専門業者に売却してリサイクルする施設です。配達部門のトラックの帰り便を利用したCO₂削減や施設の電力を賄う太陽光発電など、環境に配慮した取り組みを多数行っています。ロジセンターは、コープさっぽろトドックの物流を一手に担う施設です。道内で初めて専用コンテナをロボットが出し入れするオートストアを導入し、大幅な省スペース・労働環境改善・人件費削減に成功しました。

今回の視察で特に印象に残ったのは、あらゆる場所でコスト削減が徹底されている点です。エコセンターの川崎センター長は、これらの事業で得た利益が別の社会福祉事業に使われると仰っていました。コスト削減で浮いた資金が社会的弱者のために使われるのは、誰一人取り残さないSDGsを体現した素晴らしいシステムだと思います。多くの事を学べた、意義のある地域研修でした。

SDGsの理解につながった地域研修

私たちはSDGsの理解を深めるために、江別市にあるトドックエコセンター、北海道ロジサービスに訪れました。トドックセンターでは、全道から運ばれてくる資源を回収し、再利用可能に加工する施設です。それだけではなく、実際に収集した資源を用いて作られたあすもり資料室などを併設しており、肌で環境への配慮を感じることができました。特に、発泡スチロールを加工して作られた「下駄箱」には驚かされました。

外崎 直

地域経済学科 2年
釧路江南高校出身

北海道ロジサービスはコープさっぽろの流通の多くを担っており、その労働コスト削減のために自動倉庫型ピッキングシステムである「オートストア」を導入していました。このオートストアは、2時間充電で9時間も稼働できるため、形だけの労働コスト削減ではないことがよく分かりました。SDGsの目標でもある「働きがいも経済成長も」を意識した積極的な「障がい者雇用」も行っており、とても感心させられました。1日と言う短い期間での地域研修でしたが、確実にSDGsの理解に近づいたと思います。

1部 佐藤信ゼミII

参加学生数 14 名



佐藤 信
地域経済学科
教授



ゼミ室にて

コープさっぽろと SDGs

研修地：札幌市

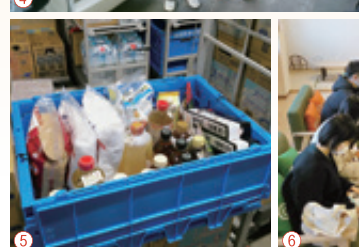
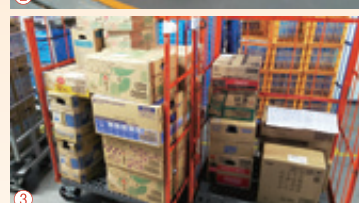
●研修目的

SDGs（持続可能な開発目標）の具体的な実践を行う段階にきている現在、コープさっぽろにあってはSDGsの各目標に繋がる活動を精力的に進めている。ゼミではいくつかのチームに分け、コープさっぽろの取り組み内容を現地視察やインタビューを通して学習することにした。

研修先・日程

11月17日 フードバンク視察
11月19日 組合員活動委員会でインタビュー

写真①SDGsの学習中。②トドックステーションにはコープさっぽろの各種車両が停まっている。③宅配トドックの返品。注文間違いによるものが殆ど。④食料を受け取りに来た施設職員へインタビュー。⑤本日のフードバンクの提供品。⑥フードバンクについての講義をする鈴木組織本部グループ長。⑦フードバンクの食料にはこのシールが貼ってある。⑧組合員活動のインタビュー。



●総括

コープさっぽろによるSDGsの各目標達成に向けた活動は、宅配トドックや移動販売車などの事業部門や、組合員活動委員会などの広い領域に及んでいる。

ゼミの研修は、新型コロナウイルス感染症対策もあり11月以降の実施となったとともに、小グループによる実施の形態をとった。

視察したフードバンクは、コープさっぽろで行っている宅配便（通称トドック）の返品を児童福祉施設へ渡す取り組みである（トドックセンターに施設担当者が受け取りに来る仕組み）。これによって、食品ロス削減と児童福祉施設への食糧提供の双方の実現が可能となっていた。

また、組合員活動における「だから、マイボトルエコ宣言」は、SDGsの組合員学習を通して、少しでもSDGsの各目標を実現するための最低限可能な取り組みの一つとしたスタートし、事業部門も動かしたことが明らかとなった。

ゼミでは、学内SDGsの具体的な実践について検討をすすめており、コープさっぽろの実践が非常に有益であり今後につながるものとなった。今回の研修に全面的な協力をしていただいたコープさっぽろの関係各位に深く感謝するものです。ありがとうございました。

学 生 研 修 記

フードバンクで見たもの

私の担当した研修では札幌市内にあるコープさっぽろのフードバンクを見学しました。フードバンクでは、宅配トドックなどで出た流通されない食品や飲料を福祉施設に提供しています。フードバンクの取り組みにはSDGsと関連があり、1.貧困をなくそう、2.飢餓をゼロに、12.つくる責任つかう責任といった目標がこれにあたります。

今回は児童福祉施設への提供の様子を見学できたため、職員の方から「無償で食品などをもらえることで資金面でも大分楽になる、さらにコーラなどの贅沢品は中々買わないので子ども達も喜ぶ、また、卒園した人にも渡すことを可能にしてくれているため、会って話すきっかけにもなる」と伺いました。このようにフードバンクの活動は食品ロスをなくし、SDGsに貢献するだけでなく、人と人を繋げる役目も担っていると感じ、現場の声を聞くことで、表面では分からないことをさらに知りたいと思いました。



木幡 大暉
地域経済学科3年
旭川永嶺高校出身

組合員活動から学んだこと

今回の地域研修では、コープさっぽろのトドックセンターを訪問して、組合員活動委員会の方々に、今年の7月に始まった「マイボトル エコアクション」についてインタビューを行いました。

組合員活動がどんな組織か、から説明していただき、「マイボトル エコアクション」が「SDGs」の学習をきっかけに暮らしの中で出来る小さな取組みとして始まったことが分かりました。組合員の方のお話で聞かれた「マイボトル運動はペットボトルの不買運動でもないし、ペットボトル=悪ではない。海をキレイにする取組みもやっているが、街から始めなければならない」という言葉で、「マイボトル エコアクション」は目的ではなく、SDGsへの取組みに対するきっかけにすぎないと感じました。本当に大事なことは、ペットボトルが出ることは仕方ないとしても、それをどう回収できるかにあると考えます。



渡邊 怜旺
地域経済学科3年
旭川永嶺高校出身

1部 西村宣彦ゼミⅠ・Ⅱ 浦幌班

参加学生数8名



西村 宣彦

地域経済学科
教授



「ハハハホステル」の前にてHBCスタッフ、宿主の小松輝さんと

産学連携による高齢者の買い物支援動画の制作

研修地：浦幌町

●研修目的

近隣の商店がなくなり、自力での買い物が困難になった高齢者の課題を解決するため、自宅視聴できるショッピング動画を、地元商店の協力を得て制作し、福祉関係者からのフィードバックを得た。合わせてうらほろスタイル教育など、同町の特色あるまちづくりを学んだ。

研修先・日程

- | | |
|--------|--|
| 9月2日 | 【事前研修】
オンライン町内商店取材・前半（対応：十勝うらほろ楽舎理事・高室智全さん、HBC帯広支局長・小川和幸さん） |
| 9月3日 | オンライン町内商店取材・後半（同上） |
| 10月12日 | 【本研修】
町内見学（TOKOMURO Lab、町内各地区車上視察）
4商店への挨拶と下見
「うらほろスタイル教育」「十勝うらほろ楽舎」「地域福祉」についてレクチャー（本間悠資さん、古賀詠風さん、佐々木すみれさん、高室宗朗さん）
ハハハホステルで交流会 |
| 10月13日 | 買い物支援動画の撮影（午前：「東栄堂」「スーパーたかはし」、午後：「たかはしストア」「ファッションRISE」）
動画編集作業 |
| 10月14日 | 動画編集作業、池田ワイン城見学 |
| 11月25日 | 【現地報告会】
買い物支援動画の視聴＆意見交換会（4回）、交流会 |
| 11月26日 | 買い物支援動画の視聴＆意見交換会（3回）、帯広市内散策 |



写真①HBCスタッフからショッピング動画制作のレクチャー（6月29日）。②「TOKOMURO Lab」内にあるデジタル森林浴体験施設「うららパーク」でフォレストデジタル株式会社CEOの説明を受ける。③翌日撮影するお店の下見と挨拶回り。④本間悠資さんから「うらほろスタイル教育」のレクチャー。⑤買い物支援動画の撮影（スーパーなかやま）。⑥最終日は動画の編集作業。

●総括

本研修は、浦幌町で持続可能な地域づくりを進める（一社）十勝うらほろ楽舎とHBC（北海道放送株）の協働事業「シニア世代が買い物可能な新たな地域メディアの開発」に、西村ゼミ生が参画する形で実施した。学生は過疎化が進む地域や都市部でも「買い物難民」問題が発生し、課題解決のために様々な試みが行われていることを学習した上で、実際に動画を制作するために、動画シナリオの考案、機材を用いた撮影練習、動画編集ソフトでの編集作業などを、HBCスタッフから直接指導を受けて学んだ。現地研修では地元の4商店にご協力いただき、店舗毎に約5分の動画を4本制作するための撮影と編集に取り組んだ。完成した動画はYouTubeにアップし、テレビに「Fire TV Srtick」を挿して、音声認識機能を持つリモコンを使って動画を視聴できるようにした。コロナの感染拡大で高齢者宅での実験は行わず、地域交流施設で福祉関係者に視聴してもらい、有益なコメントを受けた。次年度はコメントを踏まえて改善を図り、再度実証実験を行う予定である。学生は地域の現状・課題に関する知識や、動画制作のスキルだけでなく、多くの社会人と協働する中で深い学びと楽しさを体得した。浦幌町及びHBCの皆様にご感謝申し上げたい。

学生研修記

熊谷 萌

地域経済学科 2年
大麻高校出身



町民がまちを愛するまち

研修を通して感じたことは、町民の方々が浦幌町を大切に思っている、ということです。今回、動画の制作や、制作した動画の視聴・意見交換会を行うにあたり、十勝うらほろ楽舎や浦幌町内の商店、福祉関係者など、様々な方にご協力いただきました。そうした方々と話した際、皆さんが共通して使っていたのが「今後は」という言葉でした。意見交換会では「今後はこうすれば高齢者の手助けになるのではないか」など、特にその言葉が頻繁に出てきており、みな浦幌町を思う気持ちがあるからこそ、「今後」のことに真剣なのだと感じました。このように、町民の方々が浦幌の町を大切に思っているからこそ、町民の方同士や町全体の雰囲気がとても良く、地域の課題解決や活性化のために、町全体で丸になって取り組んでいることを知ることができ、浦幌町の魅力を深く感じることができました。

今村 星奈

地域経済学科 3年
北海高校出身



買い物支援の第一歩を踏み出した浦幌町

私たちは今回、買い物に出るのが困難な高齢者向けのショッピング動画の作成に取り組みました。商品のPRや配達サービスの紹介などを含め「高齢者の方に楽しんで見てもらいたい」という思いからセリフや演出にも工夫し、撮影は朝から晩までかかりました。さらに編集ではテロップやナレーションを何度も考え直し、映像づくりの難しさを実感しましたが、完成した動画を見た時喜びを感じ、見てもらうのが楽しみになりました。そして1ヶ月後、再度浦幌町に訪問し、住民の方と動画の視聴会を行いました。良い意見だけでなく、正直な厳しい意見も出ましたが、そこから動画を見る媒体や高齢者の現状など多くの課題が見つかり、浦幌町の今後につながる一歩となりました。

このように自分達の取り組みが地域のためになり、形として残せて良かったと思いました。



YouTubeで公開中の
買い物支援動画の画面（左のQRコードから動画を視聴できます。）



●現地報告：買い物支援動画の試写会&意見交換会 2021.11.25・26 浦幌町「複合施設FUTABA」



浦幌の買い物 お助け動画

北海学園大生 町内で取材



高齢者の買い物支援に向けた動画撮影に臨む学生ら。後列左は店主の高橋さん、同中央はリポーター役の坂本さん

【浦幌】北海学園大学経済学部地域経済学科の西村寛孝教授のゼミ生が12月14日、町内に滞在しながら高齢者や買い物支援の必要性を調査し、買い物支援動画の制作に向けた調査や映像撮影を行った。

西村ゼミでは、地域が抱える課題として高齢者の買い物支援にスポットを当てており、同大と有栖川学園大学が連携し、買い物支援動画を制作し、町内に配布する。今回の調査は、買い物支援の必要性を調査し、買い物支援動画の制作に向けた調査や映像撮影を行った。

西村ゼミでは、地域が抱える課題として高齢者の買い物支援にスポットを当てており、同大と有栖川学園大学が連携し、買い物支援動画を制作し、町内に配布する。今回の調査は、買い物支援の必要性を調査し、買い物支援動画の制作に向けた調査や映像撮影を行った。

4店舗が協力、来月放映

浦幌では、高齢者の買い物支援に向けた動画撮影に臨む学生ら。後列左は店主の高橋さん、同中央はリポーター役の坂本さん

各店で撮影した動画は、学生たちの手で編集し、20分程度の1本の映像にまとめ、11月中旬に町内の複合施設「FUTABA」で放映される予定。

（小幡大輝）



写真①②④学生が制作した買い物支援動画の視聴・意見交換会。③会場隣の建物で意見交換会を見守る学生たち。⑤夜会場を訪れた東栄堂・石田純一さんと動画を視聴。⑥⑦全日程を終えて全体ミーティング。⑧全日程を終えて会場「フタバ」前で関係者の皆さんと集合写真。

取材組が掲載された地元紙「十勝毎日新聞」の紙面（2021年10月18日付）

1部 西村宣彦ゼミⅠ・Ⅱ 下川班

参加学生数9名



西村 宣彦

地域経済学科
教授



「美桑が丘」の森を散策

持続可能な社会を目指す下川町における町民主体のまちづくり

研修地：下川町

●研修目的

地域資源の森林を活用し、環境・経済・社会の3側面から「持続可能なまちづくり」を進め、国の「SDGs 未来都市」にも選定された下川町の取り組みと成果や課題を学んだ。特に「町民の主体的なまちづくりへの参加」に着目し、それを可能にしている要因や背景を探った。

研修先・日程

- 10月7日 役場ヒアリング（対応：下川町政策推進課 主査・亀田慎司さん）
木質原料製造工場、一の橋バイオビレッジ視察（対応：しもかわ下川観光協会事務局長・高松峰成さん）
- 10月8日 森歩き体験（ガイド：のらねこ屋主宰・藤原佑輔さん）
「森の生活」代表理事・麻生翼さんヒアリング、「カルチャーショップあそべや」主宰・奈須憲一郎さんヒアリング
- 10月9日 乗馬体験（協力：小峰博之さん、ハナちゃん）
美桑が丘散策、サンルダム（象の鼻森林公園）展望台見学（ガイド：高松峰成さん）
「ケータのケータリング」店主・矢内啓太さんヒアリング
「道の駅 羊のまち侍・しべつ」に立ち寄り、士別市商工労働観光課・村上慎吾さん（ゼミOB）と面会

写真①下川町政策推進課の亀田慎司さんのレクチャー。②「一の橋バイオマスビレッジ」バイオマスボイラーを見学。③「のらねこ屋」藤原佑輔さんのガイドで森林散策。④「あそべや」主宰奈須憲一郎さんにヒアリング。⑤小峰博之さんの愛馬ハナちゃんに乗馬体験。⑥「ケータのケータリング」店主・矢内啓太さんと。



●総括

西村ゼミとして2013年以来8年ぶりに下川町を訪れた。同町は当時から、木質バイオマスの活用、一の橋バイオビレッジの整備、森林環境教育など、地域の森林資源を最大限に活かす「持続可能なまちづくり」の先進地だった。今回の訪問でもそうした流れの定着を確認することができたが、今回学生達が特に注目したのは、2017年に策定した「2030年における下川町のありたい姿（下川版SDGs）」の策定過程や、まちづくり活動における「町民の主体的参加」である。下川町には同町の地域性や特色あるまちづくりに惹かれて移住してきた、環境や地域への意識の高い人が多く、彼らが主体的にまちづくり活動に参加することで、まちづくりがさらに前進するという好循環が生まれている。そうした動きは地元出身の町民による主体的な活動も、刺激し始めている。林業や鉱業で発展した下川町は、元々農村的な家父長制が弱く、個人が主体的に新しいことに挑戦・行動しやすい地域性があるという話（奈須氏）も興味深かった。自立した個人が「バラバラだけどつながっている」という言葉（麻生氏）は、時代精神の先を行くイナカ・下川町を、学生の心に深く印象づけた。コロナ禍の中、快く受け入れていただいた下川の皆様に心から感謝申し上げたい。

学生研修記

河村 美空

地域経済学科2年
苫小牧南高校出身



原尾 香織

地域経済学科3年
帯広三条高校出身



活気にあふれる過疎のまち

下川町では、持続可能なまちづくりに関わる方々にお話を伺いました。特に印象的だったことは「下川町はばらばらだけどつながっている」というお話です。下川町は経済・社会・環境の三側面の価値創造と統合的解決をコンセプトに、まちの9割を占める森林を活用した様々な取り組みを行っており、2018年にはSDGs未来都市に認定されています。しかしSDGsに貢献しようと活動しているわけではなく、環境に良いことをしたい等の、根本での考えが似た人々がまちに集まり、各自で動いているのだと仰っていました。そこから、様々な人が各々の方法でアプローチすることによって、まちづくり自体も持続可能であることができるのだと感じました。しかし、そのような活動は積極的な移住者に引っ張られている状況です。町民の方の関心を惹きつけ、活動に参加してもらうことが下川町のさらなる発展につながると思いました。

広大な森林と強い意志を持つ人々

下川町には圧倒されるほど広大な森林が広がっています。その森林資源を活用した事業が多く行われており、「先人が用意してくれた素晴らしい森があれば活かさない訳がなく、今後も維持し、継承する責任がある」というお話が印象的でした。他にも、町民の方々と関わる中でまちづくりに向き合う意識の高さを感じました。また、町民が主体性に溢れていることで個人での活動が多く、この様子を「ばらばらだけどつながっている」という言葉で説明してくださいました。それぞれが想いを持ちながら行動し、それらが最終的に「下川町の活性化」につながっているのです。

研修を通して、新しいものを準備して始めるだけではなく、既に手元にあるものを最大限に活かすことの重要性を学びました。下川町には強い意志を持つ温かな人が集まっており、未来につながる持続可能な地域であると感じました。

1部 西村宣彦ゼミⅠ・Ⅱ 白老班

参加学生数8名



西村 宣彦

地域経済学科
教授



民族共生象徵空間ウポボイにて

白老町における食と多文化共生の観光まちづくり

研修地：白老町

●研修目的

白老牛や虎杖浜たらこなど、豊かな食材を観光資源に生かす取り組みを進めてきた白老町は、歴史的にアイヌの人々が多く暮らす町でもあり、2020年には民族共生象徵空間（ウポボイ）が開業した。同町の食と多文化共生を軸とした観光まちづくりの現状と課題を探った。

研修先・日程

- 8月19日 「haku hostel + café bar」オーナー菊地辰徳さんが整備している馬牧場を見学
「天野ファミリーファーム」を経営する天野志保子さん・勝人さんにヒアリング&食事
「ファミリー居酒屋 河庄」を経営する河崎光典さん・三国豊さん・志の生さん夫妻にヒアリング&食事
- 8月20日 地域おこし協力隊・野田和規さんのガイド
「ポロトの森」を散策
「グランマ」を運営する林啓介さんにヒアリング&食事
「haku hostel + café bar」を経営する菊地辰徳さんと、スタッフの谷口明華里さんにヒアリング
白老食材を使った調理体験
- 8月21日 民族共生象徵空間「ウポボイ」を見学
「Mother's」マネージャー森谷和浩さんにヒアリング

写真①ポロトミンタラで自転車を借りて出発。②菊地辰徳さんの牧場で馬のお世話。③ファミリー居酒屋 河庄でヒアリング。④「河庄」の郷土料理（オアウ、いくら丼）。⑤地域食堂「グランマ」を運営する林啓介さん。⑥鶏卵製品製造販売の「マザーズ」でヒアリング。



①



②



③



④



⑤



⑥

●総括

コロナ対策のため、役場と観光協会は書面調査で対応していただき、現地では民間事業者を中心にヒアリングを行ったが、食と観光の先進地・白老町の強みとともに、ウポボイ開業を追い風に、I・Uターンした若い世代による新たな展開を体感できた。白老牛を育成する牧場直営の「天野ファミリーファーム」は、母から息子へ代替わりし、小規模家族経営による肉質の良さを保ちながら、肉ケーキなど新メニュー開発を進めていた。店主が山で採った山菜やキノコや川魚が名物の「河庄」は、第3者への事業承継で、地元へ愛されてきた地域の食文化を継承した。地域の高齢者らが生き生きと働く食堂「グランマ」は、超高齢化する地域社会のモデルとなる素晴らしい取り組みだ。クラフトビールが飲めるカフェバー併設のホステル「haku」も、廃旅館を現代的に改修して蘇らせた地方創生のモデル事例で、馬と暮らすライフスタイルの実現を目指して、自然体で挑戦を続けている。利益や効率という価値観と一線を画した、こうした動きの底流には、アイヌ文化をはじめ多様な文化や芸術を受け入れ、交流と創造を育んできた白老ならではの風土があるのではないかと。お世話になった皆様に心から感謝申し上げます。

学生研修記

平門 藍

地域経済学科 2年
江差高校出身



地産地消のまち、白老町

白老の食や観光に関わっている様々な方から、お話を伺うことができました。夏涼しく冬暖かい気候は畜産業に適しており、白老牛のブランド価値を高めていました。地産地消にもこだわっており、現地でしか味わえない新鮮な肉や山菜は、白老まで実際に足を運ぶ楽しみのになっていることを実感しました。魚介類の保存方法にはアイヌの知恵が受け継がれ、白老牛も先人の知恵をたくさん受け継いで発展してきたと伺い、「食」が白老の重要な観光資源になるまで、数多くの歴史が詰まっていることを知りました。白老町には外から移住してきた人も多いですが、そうした人達がレストランや食堂を開いて、町内外の人々が自然に交流できる場所を創り出し、それが活性化につながっているように感じました。自然が豊かで、外から来た人や異文化への寛容さが、白老が人を惹きつける魅力ではないかと感じました。

北海道の縮図の町 白老町

北海道の縮図のような町と町長がおっしゃる通り、実際に行ってみた白老町は観光資源が豊かな町であると感じました。白老町をイメージしてもらった時に、おそらく多くの人が思い付くのはアイヌ文化や白老牛のことだと思います。もちろんこれらは魅力の1つではありますが、これ以外にも良いところは沢山あります。例えば、自然。ポロト湖周辺には様々な植物が生息しており、中に入れば新鮮な空気を吸って気分をリフレッシュすることができます。また、町の南には海が広がっており、そこで取れる虎杖浜たらこは多くの人が知る白老町の名産品です。そして何よりも、地元の方々の目の前のことに対する一生懸命さが心に残りました。訪問させて頂いた所の全てで、自分たちでやれる事はできる限りやっていきたいという姿勢が見られ、それこそが町を発展させる原動力になっているように感じました。

高橋 快颯

地域経済学科 3年
千歳高校出身



2部 西村宣彦ゼミⅠ・Ⅱ、濱田武士ゼミⅠ・Ⅱ 合同研修

参加学生数 14 名 [濱田ゼミ 7 名、西村ゼミ 7 名] + ゲスト：市川大祐 経済学科教授



西村 宣彦
地域経済学科
教授



濱田 武士
地域経済学科
教授

旧・留萌鉄道沿線の「炭鉱街(やま)の記憶」

研修地：沼田町・赤平市・芦別市

●研修目的

本学が包括連携協定を結ぶ沼田町で昨年に引き続き実施した。今年はかつて同町北部に存在した浅野・昭和の炭鉱街にゆかりのある方々にインタビューを行い、まちづくり資源としての「炭鉱街(やま)の記憶」の掘り起こしを目指した。また事前学習として赤平・芦別両市を訪問し、炭鉱遺産について学んだ。

研修先・日程

【事前研修】	
7月2日	赤平市炭鉱遺産ガイド施設見学(元炭鉱マン・三上秀雄氏のガイドツアー) 旧三井芦別鉄道炭山川橋梁見学 カナディアンワールド見学(芦別市役所・橋本氏によるガイド) 赤平市学芸員井上博登氏によるレクチャー
【本研修】	
10月1日	沼田町内まちづくり見学(まちなかほっとタウン、石狩沼田駅、くらしの安心センター) 旧炭鉱街関係者インタビュー(2セッション)
10月2日	旧炭鉱街関係者インタビュー 沼田ダム(浅野市街地跡を眺望)、旧太刀別炭鉱跡見学 まると自然体験プロジェクト見学 炭鉱資料館でふりかえり

写真① 沼田町到着後、役場の担当職員の皆様とご挨拶。②③④⑤ まちなかほっとタウン見学。



●総括

<事前学習>

沼田町の山林奥地には昭和炭鉱跡地がある。雪解け時期にしか現地見学ができない5月に訪問予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大が顕著になっていたことから自粛することになった。その代わり、事前実習として7月に中空知の主要産炭地域である赤平市と芦別市に出かけて、炭鉱遺産を見学した。炭鉱坑内の作業や炭鉱街の暮らしについて語り部の方から詳しいレクチャーを受けた。通常のゼミでも資料や文献を使って炭鉱の勉強を行ったが、現地での研修はより知識を深める切っ掛けとなった。

このようにして石炭産業の内実と炭鉱街についての知識を蓄えた上で、沼田町でのインタビューに備えた。

<沼田町でのインタビューと資料から炭鉱街を描く>

沼田町には、昭和5年に炭鉱開発が本格化して、その後、3つの炭鉱が存在した。昭和炭鉱、太刀別炭鉱、浅野炭鉱である。これら炭鉱を留萌鉄道が繋いでいた。留萌鉄道は、国鉄の留萌線の恵比島駅で接続している私鉄であった。石炭運送用車両だけでなく、貨客車両も運行していた。炭鉱は国の第4次石炭政策を受けてスクラップ対象となり閉山した。閉山後炭鉱街はなくなり、留萌鉄道も廃線・廃業となった。インタビューでは、かつて昭和炭鉱地区、浅野炭鉱地区に、恵比島地区に暮らしていた方々6人から記憶している当時のまちの暮らしや鉄道などについて聞いた。

このインタビューでははっきりしたことは以下である。

昭和炭鉱地区は留萌鉄道の終点駅「昭和駅」にあり、市街地も含めてその敷地は明治炭業株式会社という企業の敷地であった。それゆえに、敷地内は全て企業の管理下に置かれていたため自由な商業の発展はなかった。唯一、隧道マーケットと呼ばれた、山の側面から掘られたトンネル内につくられた商業施設があったに過ぎない。そこでは企業から許可を受けた商人が毎日鉄道に乗って食材や衣類などの生活物資を運び、販売していた。炭鉱街に暮らす人たちの連帯意識は強く、炭鉱街の治安は良かったという。昭和炭鉱は昭和43年に閉山した。

学 生 研 修 記

西村ゼミ
芳賀 優太郎
地域経済学科 3 年
札幌清田高校出身



西村ゼミ
平松 羽雪
地域経済学科 3 年
札幌平岸高校出身



観光資源としての炭鉱遺産

私たち西村ゼミは昨年に引き続き、濱田ゼミと合同で沼田町を訪れ、沼田町でかつて盛だった炭鉱業と炭鉱まちについて、当時の住民の方々にお話を聞きました。当時の住民の方々にインタビューをしていく中で、炭鉱まちにはどのような行事があったのか、どのような生活をしていたのかなど、事前学習の資料だけでは知ることができないことを学ぶことができました。その中で特に印象に残ったことは、炭鉱マンが農家や商人と比較して、食べるものや着るものが豪華であり、裕福な暮らしをしていたということです。炭鉱での仕事がいかに命がけで大変だったということを表わしていると思いました。沼田町には有形・無形の炭鉱遺産が多くありますが、観光資源としての活用が十分になされていないので、私たちの地域研修の活動を含め、今後のまちづくりに炭鉱遺産を活かしてほしいと思いました。

甦る炭鉱街の情景

今年度の地域研修は、昨年に引き続き2部濱田ゼミと合同で沼田町を訪問し、炭鉱が栄えていた時代を知っている方からお話を聞くヒアリングを行い、町の記録として残すために文字起こしの作業を行いました。調査によって、事前学習では知ることのできなかった炭鉱の様子や歴史の背景を、当時の思い出とともに振り返りながら学ぶことができ、とても貴重な時間となりました。

ヒアリングを通して、かつて沼田にあった浅野・昭和・太刀別という三つの炭鉱は、一括りに炭鉱と言っても街にはそれぞれ異なる特色があったこと、これらの炭鉱を繋ぐように留萌鉄道が走っていたということを理解し、当時の情景を具体的に思い浮かべる事ができました。今回作成した資料をもとに、沼田町の炭鉱の歴史をどのように後世に伝えていくかを考えて行きたいと思います。



沼田ダムにて

P22. 事前学習/ インタビュー

浅野炭鉱地区は昭和27年から古河鉱業株式会社が引き継いだ。昭和37年からは「第二会社」となる雨竜炭鉱株式会社に運営が引き継がれた。浅野炭鉱地区は留萌鉄道の新雨竜駅前が市街地中心地になっている町で歓楽街が発展した。飲食業だけでなくパチンコ屋やローラースケート場などの娯楽を提供する店もあった。炭鉱マンは、死と隣り合わせの危険な仕事をしており、給与水準が高く、また企業から住宅が与えられ、さらに光熱費の支払いも企業任せであったことから消費が旺盛だった。その消費力に吊られて市街地には商人が域外から移住し、歓楽街を発展させ、一方で昭和炭鉱地区や恵比島地区など他地区からも留萌鉄道を使って人が訪れるようになり賑わった。賑わいがあったことで、暴力団関係者がうろつき、喧嘩やめ事も多く、治安が悪かったというのも浅野地区の特徴であった。その状況は昭和炭鉱市街地と対称的であった。

恵比島地区は、もともと農村であったが、昭和5年以後留萌鉄道と国鉄の分岐点となり、機関車を回す転車台が設置され、またふたつの鉄道の職員住宅が建ち並び、鉄道職員が暮らすまちとなった。さらに炭鉱街に食材や衣類など生活物資やサービスを供給する中継点にもなり、商店の他、旅館、運送業者の店舗が集積した。しかし、昭和43～44年の炭鉱の閉山により、鉄道の分岐点機能、炭鉱街への中継機能が不必要となり、一気に過疎化が進んだ。

留萌鉄道沿線には、昭和炭鉱地区、太刀別炭鉱地区、浅野炭鉱地区以外に幌新駅をもつ幌新地区があった。これら沿線の町には最盛期1万人を超える人が住んでいたが、今では昭和炭鉱地区と太刀別炭鉱地区は国有林内に埋もれ、浅野炭鉱地区はダム建設により水没している。幌新地区と恵比島地区に暮らす町民はいるが僅かである。

<結語>

今回の記憶の掘り起こしによって、『沼田町史』や保存されている資料には見えてこない炭鉱街と留萌鉄道の記録を残すことができた。

学生研修記

濱田ゼミ
安部 涼介

地域経済学科2年
釧路明輝高校出身



濱田ゼミ
由利 朋也

地域経済学科3年
江差高校出身



たくさんの地域資源が眠るまち沼田町

私たちの地域研修は、炭鉱遺産を新たな地域資源として活用するため、沼田町の炭鉱街で暮らしていた方の当時の記憶を資料化し、後世に伝えるというテーマで実施しました。3つの炭山を繋ぐ留萌鉄道の沿線に、数千人以上もの人々が暮らしていた過去がありました。実際に暮らしていた方々からの貴重な炭鉱街での暮らしのお話を文字化する作業は、白黒写真に色つけていくような手応えがありました。

沼田町には炭鉱遺産の利活用のほか、沼田町の特産である雪中米のもみ殻と、町内で生産されたトマトを食べさせた沼田羊をブランド化する取り組みが行われています。沼田羊のように、既存の地域資源に付加価値を加え、それらを組み合わせブランド化し、地域ブランドとして売り出すという流れは、地域が外からお金を稼ぐのに、欠かせない取り組みだと感じました。

地域研修を終えて

私たち濱田ゼミは昨年と同様、沼田町に訪れました。今回は炭鉱の町として栄えていた沼田町にとっての炭鉱を資料では読み取れないことを当時から残る建物や炭鉱街に実際に住んでいた方々からヒアリングをするというテーマで研修を行いました。6人の方々にヒアリングを行い当時の炭鉱住宅での様子や炭鉱員の話、街の様子、隧道マーケットの様子など実際に見て体験してきた人たちの話はどの資料にも載ってないものばかりでメモを取るのに必死でした。そのほかにも当時流行ったものや、楽しかったこと、遊び、行事などなど、時間が足りないほど濃い話をしていただきました。

当時の記憶を生の声で聴けたことは、この先にもなかなかできない貴重な時間だったなとこの学生研修記を書いている今改めて感じることができました。



町内見学&散策、まちなかほっとタウンへ

写真⑥町内見学&散策、暮らしの安心センター。⑦⑧⑨炭鉱街の記憶インタビュー。⑩⑪旧・九州鉱山太刀別炭鉱の施設跡。⑫自然体験プロジェクトの一環で沼田町にやってきた馬。



⑥



⑦



⑧



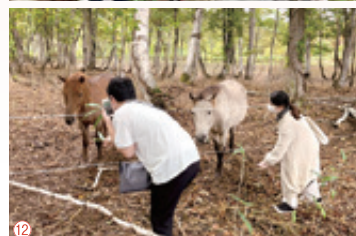
⑨



⑩



⑪



⑫

●インタビュー（聞き書き）～沼田町の炭鉱街（やま）の記憶～

●2部西村ゼミ・2部濱田ゼミ合同事前研修 [写真下：2021年7月2日 赤平市・芦別市]

「聞き書き」 ～沼田町の炭鉱街（やま）の記憶～

語り部：西田篤正さん

1941年、沼田町昭和生まれ。

中学卒業まで昭和で暮らし、高校進学とともに深川市へ。

沼田町役場に就職し、1999年～2011年の12年間、町長を務めた。

「昭和駅の近くの山の手というあたりは、炭鉱の職員や学校の先生が住んでいました。反対側の上の方に鉱員が住んでいた区域があり、こちらの沢の方は「何々組」といって、炭鉱に雇われた組員とか馬車を引く人達が住んでいました。それ以外に一般の人が住むところはないんですよ。炭鉱（やま）に関係している人だけでした。」「商売をしている人も、閉山の間に少しいたけれど、全く会社に関係ない人は入れなかったですね。鉱業所がやってる「配給所」という、今のデパートを小さくしたようなところがあって、あとは隧道（ずいどう、トンネルのこと）の中に商店が10軒くらいあったかな。隧道のお店で働く人は、沼田市街や恵比島から留萌鉄道で通いました。人口が4千人以上いたから、結構もうかってたんじゃないかな。」

「配給所の横にキャンディー屋さんがあって、そこに買いに行く時に、自転車で隧道マーケットの中を通った記憶があるね。」

「小学生時代はとにかく山遊びをしたね。ドングリとかクルミとかで、どングり戦争やクルミ戦争をね、自分達の陣地を山の中に作って遊んだね。それが唯一思い出に残る遊びだね。たくさん子どもがいたからね。川は石炭で汚くて遊べなかった。川で遊ぶときは、浅野と昭和の間にある太刀別川まで、3-4km歩いて、泳いで、何か取って、帰ってきていたね。」

「食で思い出に残っているのはニシンだね。石炭を積む貨車でニシンが来るんですよ。留萌の方から。選炭場のすぐ近くに貨車を止めて、全山放送で要る方は取りに来てくれて。タダで。貨車に何台もニシンを積んだのを、ぱっと開けて、好きなだけ持っていきな。だからその時期は、あちこちの炭住（炭鉱住宅）の前でね、ニシンを干す、開いて、ある程度乾くと、屋根裏に入れるんだね、虫がつかないように。すごかったですよ、煙が。みんな家の前で焼いてるでしょ。七輪で。入ってくるのが一斉だから、一斉に焼いてました。家の中では焼けないですから。当時のニシンは脂がすごかったですからねえ。」



写真①③旧・住友赤平炭鉱立坑構内を元炭鉱マンの三上秀雄さんのガイドで見学。②赤平市炭鉱遺産ガイダンス施設で学芸員の井上博登さんからレクチャー。④旧北炭赤間炭鉱のズリ山777階段からのぞむ赤平市街。⑤旧三井芦別鉄道炭山川鉄橋見学。⑥カナディアンワールドを芦別市職員・橋本氏のアテンで特別見学。

1部 濱田武士ゼミⅠ・Ⅱ

参加学生26名



濱田 武士

地域経済学科
教授



羊蹄山と洞爺湖をのぞむ洞爺湖温泉開湯100年記念モニュメントで

コロナ禍における洞爺湖町の移住定住者の動向と観光

研修地：洞爺湖町

●研修目的

新型コロナウイルスの感染拡大によるパンデミックによって観光地は大打撃を受けた。本地域研修では、道内でも有数の観光地である洞爺湖町に訪問してまちづくりを学ぶと共に移住者の動向や交流人口について調査した。

研修先・日程

- 10月4日 洞爺湖町役場
火山科学館
- 10月5日 洞爺湖畔で観光客へのアンケート調査
観光協会ヒアリング
移住者ヒアリング
- 10月6日 洞爺湖中島の散策
森林博物館

写真①観光客へのアンケート調査。②有珠山から見える昭和山。③地域おこし協力隊員へのヒアリング。④ホテル経営者によるレクチャー。⑤中島での集合写真。⑥中島散策のための案内。⑦観光フェリー内で撮影。



●総括

洞爺湖町は火山のあるまちだが羊蹄山や洞爺湖などの景観を楽しみながら温泉を楽しむ観光の町としても知られている。少子高齢人口減少が進行しているが、近年は毎年コンスタントに移住希望者が訪れており、コロナ禍の2020年度は近年でもっとも多かった。ヒアリングなどによると、SNSの発展により移住者が移住者を呼び込むようなネットワークが形成され、移住しやすくなっているようである。その一方で観光業は窮地に立たされていた。コロナ禍以前はインバウンドにより観光業は好調であったが、日本人観光客が減少気味であったうえ、2020年3月以後インバウンド効果はほぼゼロとなった。しかも緊急事態宣言によって日本人観光客も激減し、統計整備後過去最低の観光入込客数となった。そのような中で実施した現地での観光客アンケート調査では道内のリピーターや比較的壮年層の観光客が目立ち、若年層は少なかった。また本学学生に対して行ったアンケート調査によると、それら若年層の取り込みにはSNSの発信が重要だとわかったが、洞爺湖町が発信しているSNSはほぼ見られていなかった。使う写真やSNSの発信方法に工夫が必要であり、そのことをゼミで考察した。

学生研修記

西山 有輝

地域経済学科 2年
銘路明輝高校出身



地域研修を終えて

私たち濱田ゼミは温泉や綺麗な景観などで有名な観光地である洞爺湖町を訪問しました。洞爺湖町を訪問した目的としては、洞爺湖町の防災と観光のまちづくりを学ぶということと2020年から始まったコロナ禍での現状を知り、今後の地域活性化に繋がる意見を私たちが提案するというものでした。

実際に、訪問してみて観光協会や移住者のお話から、洞爺湖町の観光業に力を入れより観光客を増やしたいということや洞爺湖町の景観の魅力がすごく伝わってきました。しかし、現在の洞爺湖町はコロナの影響から、観光客は減少しており、観光収入は低下していました。また、私たちが行った観光客アンケートから20代の若い層の観光客が少ないことが分かりました。そのことから、観光客を増やすためにSNSなどを積極的に行い、若い層に洞爺湖町の魅力を伝えていくべきだと私は考えました。

山口 朋華

地域経済学科 3年
札幌山の手高校出身



移住者と地域コミュニティの重要性

私たちは観光地である一方、活火山をもつ洞爺湖町を訪れました。洞爺湖町は洞爺湖周辺の自然豊かな景観と、有珠山によって湧きあがった温泉を楽しむ観光地として有名な町です。

近年、この景観やスローな雰囲気求めて移住する人が増加しています。何度も訪れたいと思えるようなハード面の充実性や、都会では味わえない自然の中での子育てができるなどの魅力があり、加えて様々な行政支援と移住者による地域コミュニティが形成されていることによる入っていきやすい雰囲気が、移住者が増えている要因だと感じられます。しかし、まだ地域住民と移住者間の融和の問題は拭えず、さらなるコミュニティの構築が必要とされています。これらのことから、人口流出などによる高齢化や人口減少の歯止めにはこうした移住者を受け入れる体制、地域住民による受け皿が非常に重要なのだと感じました。

1部 早尻正宏ゼミⅡ

参加学生22名（札幌市10名、鹿児島県垂水市12名）



早尻 正宏
地域経済学科
准教授



上：自作したカッティングボードを手に（札幌市）、下：霧島錦江湾国立公園の高峠で桜島を背景に（鹿児島県垂水市）



「川上」と「川下」をつなぐ木育の構想

研修地：札幌市、鹿児島県垂水市・鹿児島市

●研修目的

テーマは昨年度に続き「木育」である。昨年度は「道民の森」（当別町）を訪問し、「川上」（森林利用）のうちレクリエーションに焦点を当てて木育の実態を学んだ。今年度は「川上」の林業に着目すると同時に、「川下」（木材利用）にも視野を広げて木育の理解を深めた。

研修先・日程

- 9月24日（株）河野銘木店の事務所兼展示場
瀬口健一・代表取締役のご挨拶・事業説明、商品展示場の視察、カッティングボードの図案づくり
- 9月27日（株）河野銘木店の工房
工場の視察、カッティングボードづくり
- 10月15日（株）河野銘木店の事務所
北海道石狩振興局森林室の渡邊基・主査による木育のレクチャー、（株）河野銘木店の宮島弘之・取締役営業部長と後藤はづき・同社社員との意見交換会
- 12月9日 鹿児島大学農学部附属高隈演習林
井倉洋二・演習林主任によるガイダンス
- 12月10日 鹿児島大学農学部附属高隈演習林
井倉主任による現地踏査（高峠登山、演習林視察）、牧野耕輔・特任講師による土場（木材集積場）の視察、チェーンソー作業体験、薪割作業と火起こし
- 12月11日 さくらじまビジターセンター
防災教育に関するフィールドワーク
鹿児島大学農学部
同大学院講義内で地域研修成果報告（奥山洋一郎・助教主催）
- 12月12日 鹿児島市内
まちづくりに関するフィールドワーク（城山登山）

●総括

今年度の地域研修は「川下の木育」と「川上の木育」の二回に分けて実施した。前者の「川下の木育」については、北海道石狩振興局森林室の木育事業の一環として、無垢材を用いた家具の製造・販売を営む（株）河野銘木店において8～9月の3日間の日程で実施した。本学にほど近い同社では近年、道産木材の利用にも力を注ぐ。研修では、同社の展示場と工房の視察、およびカッティングボードの製作を通じて「木育」の理解を深めることができた。最終日の同社スタッフとの意見交換会では、木育を通じたビジネスの可能性を巡って活発な議論が交わされた。後者の「川上の木育」については、12月に4日間の日程で鹿児島県垂水市を中心に実施した。鹿児島大学農学部附属高隈演習林では林業を学ぶフィールドワークに取り組み、自然・暮



チェーンソーによる造材作業体験

らし・林業をつなぐ「木育」の在り方についてヒントを得た。また、さくらじまビジターセンターでは防災教育の大切さを学んだ。本研修の締めくくりとして、鹿児島大学大学院農学研究科の講義に参加し、森林科学を学ぶ大学院生を前に北海道の「木育」の現状と課題をテーマにプレゼンテーションを行い、好評を得ることができた。

学生研修記



西村 優介
地域経済学科3年
北海道栄高校出身

地域研修を終えて

私たちは、昨年「道民の森」で「木育」を学んだ。今年度もさらに知識と経験を深めるべく、札幌市豊平区の（株）河野銘木店を訪問した。今回の研修のテーマは『「川下の木育」の実態を把握し、その発展の可能性を探る』ことである。家具の製造・販売を営む同社は「木育」にも力を入れており、そこでのカッティングボードづくりや社員の方々との意見交換を通して「川下の木育」の実態と課題を学ぶことができた。その結果、「木育」を日常生活の中で意識することの難しさや、一般の人々の木材に関する知識の乏しさなどが明らかになった。今回は素材選びから木材加工までも木製品づくりの一連の流れを体験したが、こうした「川下の木育」を通して木製品に対する消費者の興味・関心を高めることが、北海道の豊富な森林資源を生かした持続可能な森林経営に繋がっていくものと考ええる。

北海道と鹿児島の森林

今回の地域研修は、鹿児島県垂水市に位置する鹿児島大学農学部附属高隈演習林で実施した。広大な土地と豊かな自然環境に恵まれた森林を舞台に登山や薪割など森林環境教育を体験した。こうした活動を通して北海道との森林との相違点に気付くことができた。登山した高峠の山頂からの景色を見ると、高隈演習林にある人工林のほとんどがスギやヒノキであることが分かった。それに対して、北海道の人工林はトドマツやカラマツが大半を占めている。このことから、地域の気候や風土に適した植樹・育樹が行われていることを実際に確認することができた。

かなりハードなスケジュールだったが、現地に訪れることでしか感じることはできないことを経験できた有意義な研修であった。

写真①（株）河野銘木店での意見交換会。②カッティングボードづくり、研磨作業。③鹿児島大演習林にて、井倉洋二・演習林主任によるレクチャー。④火起こし体験。⑤鹿児島大農学研究科での研修成果報告会。



1部 平野研ゼミⅠ

参加学生8名



平野 研

地域経済学科
教授



ゼミ室にて

大学生協でのフェアトレード商品販売再開の取組と調査

研修地：札幌市

●研修目的

コロナ禍で中断されていた、北海学園大学生協でのフェアトレード商品の販売の再開を通じて、販売開始の経緯や、関係者のフェアトレードに対する思いなどを聞き取り調査するスキルを獲得する。同時に、明らかになった問題への解決策を提案し、実践する力を身に着ける。

研修先・日程

11月10日 フェアトレード雑貨&レストラン「みんなる」和田美加代店長インタビュー
11月22日 函館大谷短期大学助教 伊藤好一さん
11月29日 北海学園大学生協統括マネージャー 藤澤さん

写真①フェアトレードカタログ。②伊藤さんインタビュー。③④みんなる調査、店舗内。⑤大学生協店長インタビュー。⑥取扱商品候補。



●総括

コロナ禍に入学した2年生にとって、大学生協は馴染みが薄かったが、フェアトレード商品販売再開を通じた学びは、生協を身近にしたのと同時に、具体的な経済活動の当事者という視点から「エシカル（倫理的な）経済」を考えるきっかけとなった。

大学生協での商品販売の関係者への質問項目を検討すると同時に、販売再開イベントを企画するが、コロナ禍の状況が不透明で再開のめどが立たず、調査が見切り発車の形となった。企画が定まらないことを聞き取り時に話すと、かえってそのことが功を奏し、様々な話を聞くきっかけとなった。大学生協では、対面が行われない大学での深刻な経営状況、仕入れ先のショップでは、これまで高校生・大学生と協力してきた販売のやり方、生協販売の先駆者の先輩には、これまでにあった中断の危機など、より現実的な問題やその解消のためのヒントを捉えることができた。

インタビュー調査や企画準備が伸びてしまったことから、年内のイベント実施が難しく、地域研修としては企画段階での報告となってしまったことが反省点といえる。しかし、今回の企画は、3年次の地域研修へと学びを継続し得るものである。

学生研修記

北垣 優翔

地域経済学科 2年
帯広緑陽高校出身



田村 遥菜

地域経済学科 2年
旭川南高校出身



フェアトレード商品の販売再開に向けて

私たち平野ゼミは、前期はコロナ禍の影響もあり、札幌市内・北海学園大学内での地域研修となった。今回は、「学園生協でのフェアトレード商品の販売再開」というものに目を向け、聞き取り調査をメインに研修を行った。

今回の研修は、北海学園大学卒業生の伊藤さん、フェアトレードの商品を扱うみんなるさん、北海学園大学生協さんに協力してもらい、フェアトレード商品の販売再開に向けて様々なお話をさせていただいた。この企画自体まだ実施することができていないが、来年の1月頃から開始して、更にそれ以降も継続していくことができるようにするために、私たちは日々活動をしている。コロナ禍の影響も考えると、売り上げ面などで厳しいものもあると思うが、この活動を通じて、フェアトレード商品の魅力を学園生や教職員など多くの方々にお伝えすることができればいいと思う。

北海学園生協におけるFT商品販売と目的

札幌市がフェアトレードタウンに認定されていることもあり、今回の地域研修として、以前北海学園大学生協で行っていたフェアトレード商品の販売を再開することを目標に活動を行った。フェアトレード商品の仕入れ先となる「みんなる」さんや、大学生協の店長さん、以前のフェアトレード商品販売に大きく関わっていたOBの伊藤さんに聞き取り調査を行い、フェアトレード商品の背景や仕入れ過程、大学生協のしくみや状況を知り、フェアトレード商品を販売するにあたってのアドバイスなどを聞くことができた。今回の調査で学んだことを活かし、仕入れる商品や、販売の際の装飾などにこだわり、フェアトレード商品の販売イベントを行い、より多くの人にフェアトレードの周知を図るとともに、最終的には大学生協でのフェアトレード商品の常設を目標に引き続き活動していきたいと思う。

1部 平野研ゼミII

参加学生数13名



平野 研

地域経済学科
教授



ゼミ室にて

函館市における SDGs に関する取り組みの現状

研修地：函館市

●研修目的

近年注目されている SDGs やフェアトレードというエシカル（倫理的）社会への取り組みの地域における展開について、函館市を事例に調査を行った。企業・行政・市民運動という視点から調査対象を選出し、聞き取り内容をグループごとに検討し、函館市の現状と課題を考察していく。

研修先・日程

- 11月15日 大鎌電機 営業部・SDGs推進室
函館市地域交流まちづくりセンター
- 11月16日 函館YWCA・カフェ「リ・ボン」
はこだて工芸舎
- 11月17日 函館市役所 観光誘致課・都市計画課
はこだて街なかプロジェクト

写真①大鎌電機社屋。②大鎌電機インタビュー。③函館市地域交流まちづくりセンターインタビュー。④はこだて工芸舎インタビュー。⑤函館YWCAインタビュー。⑥函館市観光局インタビューで。⑦函館街なかプロジェクト。



●総括

本ゼミでは2年次に札幌市におけるフェアトレード活動の現状について調査研究を行い、本地域研修ではその知見をさらに函館市と比較することで深めていくこととなった。調査準備の中で、SDGsに取り組む企業への私募債の仕組みを知り、銀行への調査対象を拡大するなど、自らの気づきで学びを深めることができた。一方で、下準備や連絡の不足で対象から外した団体が、現地調査の中で重要な役割を果たしていることに気づかされ、公開することとなった。このような調査研究を通じて、地域の取り組みは有機的構成されており、その連携がとても重要であるということ学ぶことができた。札幌市が環境局などを中心としてSDGs未来都市として動き始めているのに対して、函館市での軸が見えにくく潜在的にある市民団体や、企業の力をうまく活用できていないのではないかと、という視点で調査報告を作成した。当初は企業・行政・市民運動という班に分けて取り組んでいったが、報告書を作成していく中で、「連携」が重要であると気づき、班を超えた議論へと発展したことも今回の地域研修の成果であったといえる。

学生研修記



武田 奏

地域経済学科3年
札幌北陵高校出身

地域研修を終えて

今回私たち平野ゼミIIでは、「函館におけるSDGs」というテーマを掲げて函館で3日間地域研修を行った。行政・市民活動・企業の3つのグループに分かれ、SDGsとの関わりや函館市の現状などの話を伺った。そこで、各機関の活動、そして函館市の課題など具体的な話を伺うことができた。

そして、研修初日から3日間検討会を開いた。そこでは、訪問先でのインタビューの内容を班ごとにまとめて発表を行い、各班の動向そして、ゼミ内での意見や考えの共有・議論を行った。検討会により函館の行政・市民団体・企業の関連性や函館市について知識を深める良い機会になった。今後も報告会に向けてゼミ内でこのような議論をさらにを行い、SDGsに馴染みがない人たちでも理解してくれるような発表を行えるように準備を進めていきたいと思う。



遠藤 稜也

地域経済学科3年
札幌新川高校出身

函館市のSDGsから考えたこと

僕たちは、函館市においてSDGsがどう扱われているか、どんな活動がなされているかについて知るため、行政班、市民団体班、企業班の3班に分かれ、インタビューという形で訪問調査を行いました。特に印象的だったのは、電気工事会社である大鎌電気さんです。社内でのSDGs理解度向上の為にボードゲームを活用するなど、SDGs推進に対して積極的に取り組んでいました。

函館市のSDGsの課題として感じたのは、SDGs達成活動の推進に市役所、市民団体、企業それぞれが意欲的に関わっていきながらも、まだまだ連携が足りていないのではないかとことです。また、SDGsの枠組みの大きさや曖昧さから、実態が伴っていない活動もSDGsに含めてしまうことがあります。メディアにも取り上げられ、広がりを見せているSDGsですが、その活動が本当に持続可能な社会につながっているのか考える必要があると思いました。

2部 平野研ゼミⅠ・Ⅱ

参加学生6名



平野 研
地域経済学科
教授



ゼミ室にて

札幌市内企業のSDGsとフェアトレードの取り組み

研修地：札幌市

●研修目的

本地域研修では、SDGsやフェアトレードに取り組む札幌市内の企業や店のマルシェ形式のイベントを企画することを通じて、企業の取り組みについて調査し、SDGs未来都市に認定されている札幌市の課題についても考察していくことを目的としている。

研修先・日程

12月2日 フェアトレード雑貨&レストラン みんたる
12月10日 オーガニックショップ あすらん
環境友好雑貨店 これからや

写真①みんたる店舗。②あすらんでインタビュー。③これからやでのインタビュー。④⑤テレビ局へのアンケート。



●総括

昨年度の地域研修で札幌の企業・石屋製菓にフェアトレード調査、提案を行った経緯を受け、本年度は札幌の大企業と中小規模のフェアトレード店舗との連携のきっかけとなるようなマルシェ型の企画を行うことからスタートした。食品を中心としたため、大企業としては市内の大手製菓企業へ調査依頼を行ったが、コロナ禍もあり、対面での調査が難しく予定より小規模となった。しかし、イベント広報の点からテレビ局も調査対象にしようというアイデアが出され、テレビ局のSDGsへの取り組みにも調査することとなり、それをインターネットでのアンケート方式で実施することとなった。このような調査方法は初めての試みで、試行錯誤の結果、無事に終了することができた。調査結果を集約しやすいという利点がある一方で、質問意図を十分に理解してもらえなかった回答もあり、今後の反省点ともなった。企画したイベントは22年度の5月予定となったため、今後も継続してイベントを軸として調査を進めていく。特に市内の大企業の聞き取り調査など課題も明確になってきているため、さらなる調査の展開が望まれる。

学生研修記

三田村 祐汰
地域経済学科2年
富川高校出身



森 知磨
地域経済学科3年
千歳高校出身



フェアトレード・SDGs活動の実態

今回私たちは、フェアトレード・SDGsの取り組みを行っているメディアや企業・店舗にインタビューやアンケート活動の協力をお願いし、その実態について学びました。

フェアトレード商品を多く扱っている個人商店では、商品を現地から直輸入するなどし、自店舗だけでなくイベントに合わせて出店するなど、様々な工夫が施されていました。また、札幌市がフェアトレードタウンに認定されたこともあり、フェアトレードやSDGsに関心や興味を持ち、お店に足を運ぶ人が増えていることが分かりました。

毎年5月にフェアトレードフェスタが行われていますが、フェアトレード・SDGs活動を行っている企業や個人商店に協力を願ひし、我々学生が主体で開催するSDGsカフェの企画なども考えています。

札幌企業SDGsやFTの取り組み

今年度は昨年度にできた石屋製菓様とのつながりを大事にしたいという思いがある中で地域研修がスタートした。まずは昨年度の結果を踏まえてほかの道内企業のSDGsやFTの意識調査を行うことから始まった。千秋庵様、きのとや様、HTB様に調査を行うことになったがうまく調査を行えたのが千秋庵様のみだった。この時点で前期が終わってしまい幸先不安だった。その後石屋製菓様と行えることを考えるにあたって他企業や店舗を含めてイベントを企画し、前期で行えていなかった調査をこのイベント企画に参加依頼と同時にその企業や店舗のSDGsやFTの活動について調査を行った。また調査を行えていなかったHTB様の調査は幅を広めて道内のテレビ局全体に調査を行うことに決めた。イベント企画を含め現時点ではすべて終わっていないが来年度を含めて完成させていきたい。

SDGsや環境問題に関する番組について

	STV	HBC
SDGs関連番組の増加	とても増えた	とても増えた
SDGs関連番組作成 キー局・ローカル局割合	どちらも同じくらい	どちらも同じくらい
SDGs関連番組重視度	重視している	とても重視している
重視しているSDGs目標	SDGs全般 主に3・4・5・7・11・13・14・17	SDGs全般
放送しているSDGs関連番組	未来につなぐ	今日ドキッ！・あぐり王国北海道NEXT・天気と未来とSDGs・SDGsシーズなど
通常の番組とSDGs関連番組視聴率の違い	どちらも変わらない	分からない
通常の番組とSDGs関連番組スポンサーの反応の違い	どちらも変わらない	分からない
計画しているSDGs関連番組	SDGsウィーク	番組やイベントなどで継続して取り組み

番組以外のSDGsや環境問題に関する活動について

	STV	HBC
番組以外の活動	行っている	行っている
担当部署	事業局 社長室 SDGs推進室	各部署 広報CSR部が取りまとめ
担当部署 設置理由・経緯	企業や学校と連携する経緯が豊富	
番組以外の活動 社外的な広報活動か 広報目的でない社内的活動か	どちらかというと社外的なもの	社外的でも社内的でもある
計画している番組以外の活動	自治体や企業、大学との連携による、新たな枠組みでの「推進活動」	
社外で主導・協力しているプロジェクト	協力しているプロジェクトがある	主導しているプロジェクトがある

1部 藤田知也ゼミ

参加学生数10名



藤田 知也
地域経済学科
講師



貸切列車の中で記念撮影

地方鉄道における沿線観光資源を活用した地域活性化

研修地：秋田県北秋田市・仙北市

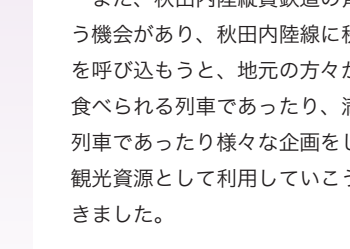
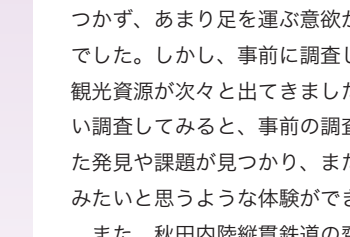
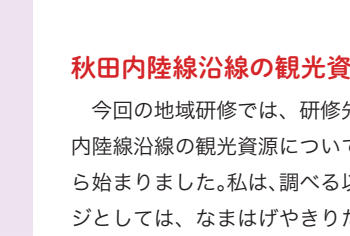
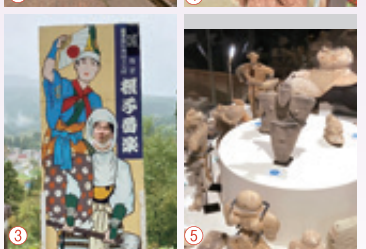
●研修目的

近年、地方圏の鉄道事業者において観光利用者を獲得するための取り組みが見られている。今回の研修では、地方鉄道事業者が観光に取り組む意義や観光を通じた地域活性化について学ぶことを目的に、様々な「イベント列車」を企画している秋田内陸縦貫鉄道沿線を訪問した。

研修先・日程

10月15日 鷹巣駅・縄文小ヶ田駅・阿仁前田温泉駅・笑内駅・阿仁マタギ駅・角館駅で観光資源の調査
阿仁合駅で秋田内陸縦貫鉄道の社員の方の講演

写真①内陸線の車窓から。②オリジナルカラーの内陸線車両。③根子集落にて。④マタギ。⑤縄文遺跡の土偶たち。⑥名物きりたんぼ鍋。⑦秋田内陸線の齊藤さんによる講演。⑧貸切証明書。⑨帰路の貸切列車。



●総括

今回の研修では、①秋田内陸縦貫鉄道の沿線観光資源を調査し、②同社の地域活性化に関する取り組みを学んだ。1点目について、秋田内陸縦貫鉄道沿線には様々な観光資源が点在していることから、6駅で沿線観光資源を調査した。各グループは実地調査で観光資源の利活用に際しての課題を見つけ、さらに、事前学習の段階では知らなかった観光資源を発掘したグループも見られた。2点目については、秋田内陸縦貫鉄道のイベント列車・観光列車の企画造成を担当されている社員の方に講演して頂き、同社がどのような意図でイベント列車を運行しているか、地域活性化にどのように貢献しているかを学んだ。

現状の課題としては、観光資源の最寄駅からのアクセスが悪いケースが多いこと等が挙げられる。観光資源への最寄駅からのアクセス改善、即ち二次交通の改善のため、レンタサイクルの実施やコミュニティバスの運行が、今後さらに秋田内陸縦貫鉄道が観光利用客を取り込むために重要であると考えられる。

本研修では講演や貸切列車の利用にご協力頂いた秋田内陸縦貫鉄道の担当者の方をはじめ、訪問先で多くの方々にご大変お世話になりました。この場をお借りして御礼申し上げます。

学生研修記

大野 匠
地域経済学科 2年
千歳高校出身



秋田内陸線沿線の観光資源

今回の地域研修では、研修先である秋田県の秋田内陸縦貫鉄道の観光資源について調査していくことから始まりました。私は、調べる以前は秋田県のイメージとしては、なまはげやきりたんぼくらいしか思いつかず、あまり足を運ぶ意欲が感じられなかった県でした。しかし、事前に調査していく中で魅力的な観光資源が次々と出てきました。実際に現地に向かい調査してみると、事前の調査では見つからなかった発見や課題が見つかり、また秋田県に足を運んでみたいと思うような体験ができました。

また、秋田内陸縦貫鉄道の齊藤さんにもお話を伺う機会があり、秋田内陸線に秋田県内外から観光客を呼び込もうと、地元の方々が作った温かい料理が食べられる列車であったり、満天の星空を楽しめる列車であったり様々な企画をしていて、鉄道自体も観光資源として利用していくとする動きを実感できました。

堀 雅気
地域経済学科 2年
栃木県立石橋高校出身



秋田の頑張るローカル線

今回の地域研修で、私は秋田県を走る第3セクター鉄道である、秋田内陸縦貫鉄道・通称内陸線を訪れた。沿線を巡る道中、阿仁合という駅で担当者の方からお話を聞いた。

そこで聞いた内容は、発表では1枚のスライドにまとめたけれども、自分にとってその何十倍もの実りがあるものだった。内陸線の方は厳しい経営の中で、内陸線に乗ってもらおう、リピーターになってもらおうと、様々な企画列車や車内の工夫に全力を注いでいた。それでも中々状況は好転していないものの、自分はここまで努力している鉄道会社を見たことがなかった。人口減にコロナ禍が重なり、地方ローカル線の存続は、もはや公的な支援無しには不可能である。それでも、あの手この手努力して鉄道を残す意味がある。鉄道の存在が地域を明るくする。そんな大切なことを内陸線は教えてくれた気がした。

2部 藤田知也ゼミ

参加学生数4名



藤田 知也

地域経済学科
講師



モジュールの前で記念撮影

鉄道ミュージアム構想の検討とワーケーション体験

研修地：沼田町

●研修目的

廃線の危機に直面しているJR留萌本線の沿線市町村の1つである沼田町は石狩沼田駅の駅舎を活用し、鉄道ミュージアム構想を立ち上げるようになった。今回の地域研修では本構想の方向性を検討する。併せて、沼田町が計画しているワーケーション計画のモニタープランを経験し、沼田町へのフィードバックも実施する。

研修先・日程

- 10月1日 沼田町内の駅見学（石狩沼田・真布・恵比島）
図書館で資料収集
ワーケーション体験 はこだて工芸舎
- 10月2日 はたる学習館にて鉄道ミュージアム構想に関する議論
ワーケーション体験
- 10月3日 ワーケーション体験

写真①恵比島駅にて。②モジュール到着。③モジュールで過ごす時間。④⑤テントサウナ。⑥はたる学習館のワークスペース。⑦クラウド15号。



●総括

本学と包括連携協定を結んでいる沼田町は、石狩沼田駅の駅舎活用計画として、鉄道ミュージアム構想を打ち出した。同駅のリノベーションは本学工学部の学生が実施し、「中身」の方向性に関する検討を2部藤田ゼミの地域研修で実施することとなった。石狩沼田駅鉄道ミュージアム構想の方向性としては、鉄道ファンのみならず家族連れなど幅広いジャンルの人々が楽しめるような施設にし、鉄道に関するVR体験に加え、町内の飲食店の紹介なども行う町の広報機関のような位置づけにすることが良いと結論付けた。加えて、クラウド15号が保存されている幌新地区との交通アクセスも改善することで駅近辺だけでなく、より広い地域に観光客来訪の効果を行き渡らせる必要があると指摘した。

また、沼田町が計画しているワーケーションプランへのフィードバックを行うことも本研修の目的であったことから、学生たちはモジュールと呼ばれる宿泊施設に宿泊し、テントサウナを利用して「ととのう」などワーケーションのモニタープランを体験し、改善点を提示した。

本研修の実施にあたり、沼田町役場の大原様をはじめ、大変多くの方にお世話になりました。この場をお借りして御礼申し上げます。

学生研修記

坂元 凌河

地域経済学科 2年
札幌静修高校出身



北海道の観光と交通の魅力と課題

今回の沼田町での地域研修を通して、北海道の観光と交通の、魅力と課題を再確認することができました。

沼田町には、北海道に住んでいる人ですら知らない観光の魅力がたくさんあります。でもその魅力を上手く世の中に伝えられていないのが現状です。さらに、人口減少により鉄道利用客が減っていて、留萌本線は廃線の危機にあります。

この留萌本線は沼田町と他の町を繋ぐ線路で、この線路が絶たれてしまうと、沼田町の魅力が失われてしまいます。魅力を失わないためにも北海道の観光と交通は、新たな工夫が必要で、課題解決のために学ぶことはたくさんあります。

実際に、地域研修を通して沼田町の魅力に触れることができた貴重な研修を忘れず、沼田町のみならず北海道の魅力を失わないように、地域研修での経験を発信して行ければと思います。

山本 達也

地域経済学科 2年
札幌光星高校出身



鉄道を活かした町づくり

僕たち藤田ゼミは沼田町に行き、鉄道と観光について学びに行きました。現在沼田町にある留萌本線は廃線の危機に陥っています。その危機を乗り越えるために沼田町の資源を活かした町づくりをできないか、ということで実際に足を運んで町の様子を学びに行きました。

JRが廃線の危機になっていますが、沼田町には観光としての多くの魅力があります。クラウド15号という蒸気機関車の展示や、夏にはホテルを見ることがや、あんどんまつりなどがあり、観光としての魅力が多くあります。町にある資源を活用していくことで観光客の増加、JR廃線の危機を乗り越えることができると感じました。今後の沼田町の課題として、沼田町のことを多く知ってもらうための広告活動が必要だと感じました。写真や調べるだけではなく、実際に現地で体験してみないとわからないことも多くあり、非常に貴重な経験となりました。

1部 古林英一ゼミ

参加学生数7名



古林 英一

地域経済学科
教授



野幌森林公園にて

大都市近郊の自然公園の現状と役割

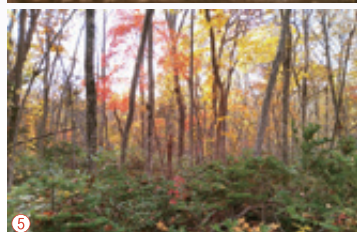
研修地：札幌市〔野幌森林公園〕

●研修目的

今年度の地域研修Ⅰは当初国立公園満喫プロジェクトの対象となっている阿寒摩周国立公園において、自然環境の保全と利用についての研修をおこなう予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大の影響で断念せざるを得なくなり、大都市近郊における自然公園の現状と役割をテーマに変更し、北海道立自然公園である野幌森林公園を研修先とした。

研修先・日程

10月27日 北海道博物館
野幌森林公園



●総括

野幌森林公園の面積は2053haに及び、その広さは大都市近郊に存在する平地林の自然公園としては世界でもあまり類をみない。公園域には若干の農地、百年記念塔、北海道開拓の村、北海道博物館、自然ふれあい交流館等の施設も存在するが、全体の9割は森林でその4割が人工林、残り6割も何らかのかたちで人の手が入った森林である。

北海道開拓が推し進められていた1877年という早い段階において、当時の北海道開拓使は現在の森林公園一帯を「永久保存せしむべき林」とし、1889年には帝室御料林として保全をはかっている。その後、紆余曲折を経て、1968年には道立自然公園に指定され、今日に至っている。

公園内にはいくつかの散策路が設定されており、今回の研修ではそのごく一部を歩いてみただけであるが、平日の昼間であるにもかかわらず、何人もの散策を楽しむ人たちと遭遇した。かつては年間50万人くらいの利用者があったのが現在では15万人程度に減少しているというものの、身近に自然を楽しめるということに加え、大学や市民団体による研究フィールドとしての役割は依然として大きなものがある。

観光的な利用という観点からみれば大きな役割を果たしているとはいえないだろうが、地域住民にとっての重要性は決して低下してはいない。とはいえ、公園事務所が廃止され維持管理が手薄にならざるを得ない一方で、アライグマなどの外来生物対応、一部の写真愛好家による野鳥への悪影響といったかつてはなかった新たな問題への施策も必要となっている。

都市近郊の自然公園の存在意義やその課題を考える有益な研修となったと考えられる。

学生研修記

広木 徹大

地域経済学科 2年
札幌光星高校出身



三上 昂汰

地域経済学科 2年
札幌清田高校出身



地域研修で学んだこと

私たち古林ゼミでは「環境経済論」について学んでいます。その中で学んだ「自然公園」について理解を深めるため、道立自然公園野幌森林公園に行きました。

野幌森林公園は1968年に自然公園に指定されました。都市近郊の自然公園であり、森林公園内は24時間無料で利用可能なため、地域住民には身近な自然として散歩コースやイベント会場として活用されています。しかし身近であるがゆえに利用者による自然への被害も課題となっているのが現状です。また公園内に通る本来車両通行禁止だが地域住民のため開放されている基線を公道化するかどうかなという野幌森林公園特有の問題もあります。

自分たちにとって身近な場所にある自然公園で様々な課題を知り、考えることができました。今回の研修で、課題や問題点などについて自分たちなりの答えを出すことが大切だと学ぶことができたと思います。

地域研修を通して学んだこと

環境経済論を学ぶ中で自然公園に興味を持った我々古林ゼミは、地域研修地を道立自然公園野幌森林公園としました。

地域研修日当日は、野幌森林公園内にある北海道博物館で職員の方にお話を聞き、その後森林を散策しました。

もちろん事前学習を念入りに行っていた我々でしたが、職員の方は我々の知らないことを沢山お話ししてくれたため、より自然や自然公園についての理解が深まりました。そして、職員の方のお話を聞いていく中で我々は野幌森林公園の課題を把握することが出来ました。その課題というのは、知識不足の野鳥撮影者が原因で野鳥が巣を放棄することや、無許可な山菜採りや盗掘などです。

今回の研修で、実際に現地に自分たちの足で赴き、直接お話を聞くことの大切さを学びました。また、把握した課題の対策なども自分たちなりに考えてみようと思いました。

写真①百年記念塔下の休息施設。②散策コース。③砂防ダム。④案内図。⑤自然林。

1部 古林英一ゼミII

参加学生数 11 名



古林 英一

地域経済学科
教授



有珠山ロープウェイ山頂駅にて

地域経済におけるジオパークの意義

研修地：洞爺湖町

●研修目的

ユネスコ登録ジオパークである洞爺湖有珠山ジオパークが地域においてどのような役割を果たしているのか、その現状と課題について学ぶことを研修目的とした。

研修先・日程

11月14日 有珠山
火山科学館
11月15日 洞爺湖観光情報センター
ジオパーク内散策路

写真①銀沼火口。②噴石で破壊された自動車（火山科学館）。③噴火による地殻変動で曲がった線路（火山科学館）。④洞爺湖観光情報センターでのレクチャー。⑤1977年火山遺構。⑥2000年噴火遺構（旧幼稚園）。



●総括

洞爺湖有珠山ジオパークはユネスコ登録ジオパークに認定されている。

周知のように洞爺湖は11万年前の有珠山の噴火によって形成されたわが国有数のカルデラ湖のひとつであり、20世紀初めの有珠山噴火によって温泉が湧出し、それ以降、観光地として発展し、支笏洞爺国立公園にも指定されている。

地球の歴史からみると、洞爺湖の形成は11万年前と新しく、有珠山は活発に活動している活火山である。ジオパークの多くが古い地殻変動によって形成されたものであるのに対して、洞爺湖有珠山ジオパークは、新しい現象でなおかつ現在も進行している地殻現象であるという点で特徴的である。ジオパークは、世界自然遺産などに比べると、一般的な知名度はまだ高いとはいえないが、1市3町にまたがる当該ジオパークはその特徴を生かし、旧来型の温泉観光からの脱却をめざしており、その成果は徐々に現れているように思われる。

また、ジオパークとなったことで、火山との共生を継続していくための、啓発活動も活発におこなわれていることも見逃せない。

学生研修記

地域研修を終えて

今回私たちは地域研修で洞爺湖町に行きました。研修の目的は、洞爺湖町がどのようにしてジオパークを活かし、活火山と共生しているのかを知ることです。

実際にジオパーク内を見学すると、洞爺湖をはじめとする美しい自然や2000年噴火で出来上がった旧国道230号線の地溝帯、噴石で穴だらけの洞爺湖幼稚園などの噴火災害遺構がありました。通常それらは人々の噴火によるトラウマを呼び覚ます原因となり残さずに壊しているそうですが、噴火による犠牲者が出なかった洞爺湖町では防災教育の学習素材や観光資源として活用していることが分かりました。また、地元住民は火山と共生するために防災教育を行って火山について学び、防災の意識を高めていることも分かりました。

実際に見て感じるということ

私たちはジオパークから洞爺湖町の地域経済の動向を研究することを目的に洞爺湖町の洞爺湖有珠山ジオパークへ地域研修に行くことになりました。事前にジオパークとはどのようなものか、ジオパークができる経緯、洞爺湖町について事前に学習した上で臨みました。

実際に行ってみると事前に学習した知識の確認ができることはもちろんのこと、調べただけでは知り得なかった情報を知ることができました。例えばジオパークの範囲は有珠山や洞爺湖など周辺を考慮していましたが、現地での話を聞き伊達市、豊浦町、壮瞥町、洞爺湖町と1市3町に広がるジオパークであることやガイドなどの育成に力を入れていて観光面での質の向上を行なっていることなど貴重なお話を聞くことができました。洞爺湖有珠山ジオパークでは有珠山の火山ということに着目した展示や話が多く、有珠山の世界的に見ても特異性のある貴重な研究材料であるということを感じました。火山による被害は事前に調べた時にある程度知っているくらいでしたが実際の噴火によって歪んだ地形や噴石の被害にあった建造物などを目にし衝撃を受けました。後世に被害が情報として伝えられるよりも被害を受けたものが実際に残っている方が伝わると私は感じました。このような噴火災害遺構があることによってジオパークに認定され続けていけるのではないかと私は思います。

石島 侑弥

地域経済学科 3年
釧路江南高校出身

中村 優斗

地域経済学科 3年
旭川大学高校出身

この洞爺湖有珠山ジオパークは火山の麓の町でありながら人的被害が非常に少なく、その結果被害を受けた建造物をそのまま残すことができるので世界的に貴重なものであると感じました。さらにジオパークに認定されたことで私たちのような学習を主にした観光客やジオパークについて詳しく学びたい人などの来訪者が増え数字に表すことは難しいがジオパークによって経済効果も出ているとお話を聞くことができました。ジオパークに認定されことで洞爺湖有珠山が世界に認められ、さらにジオパーク周辺地域にも経済効果をもたらしていることが今回の研修でわかり、また本やネットの情報だけでは知ることのできない情報やその場の雰囲気、その地域の特徴などを感じることができ今回の地域研修は見聞が広がり、有意義な研修でした。

1部 水野邦彦ゼミ1・II

参加学生数 17 名



水野 邦彦

地域経済学科
教授



幌加内町ふれあいの家「まどか」前で

朝鮮人労働の現場を見学し、実態を学ぶ

研修地：幌加内町朱鞠内

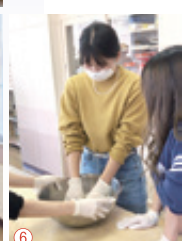
●研修目的

かつて朝鮮半島の人々が労働者として北海道に連れてこられ、日本人労働者とともに炭鉱やダム建設などの現場に投入された。苛酷な生活のなかで多くの犠牲者を生んだ労働現場の痕跡がわずかに残る幌加内町朱鞠内を訪れ、朝鮮人労働の実態を知る手がかりを得る。

研修先・日程

- 10月26日 朱鞠内湖
笹の墓標展示館（旧光顕寺）跡
遺骨発掘現場
- 10月27日 朱鞠内まどか
そば打ち体験

写真①朱鞠内湖。②朱鞠内湖畔の慰霊塔。③朝鮮人犠牲者の墓。④旧光顕寺の庫裡。⑤⑥⑦⑧⑨そば打ち体験。⑩ゼミ生の手になる蕎麦。



●総括

1935年以降、幌加内町朱鞠内での鉄道建設工事・ダム建設工事において「タコ部屋」労働がおこなわれ、多数の朝鮮人も投入された。労働者たちは24時間監視体制のもとで労働・食生活・居住の全環境において劣悪な待遇を受け、多くの犠牲者を出した。この遺体は光顕寺に運びこまれ、朝鮮人死亡者の遺体はたいいてい粗雑に林のなかに埋められ、墓標も立てられず、ただ笹の葉が墓標の代わりになっていた。のちに林で発掘された遺骨を何体か合わせて埋葬された朝鮮式の墓を研修一行は訪れた。

光顕寺はその後「笹の墓標展示館」となり、当時の資料が展示されていたが、2019年2月の大雪で建物が半壊し、危険を防ぐためにすでに取り壊されていた。また、タコ部屋労働によって建設されたダムの内部は、こしは感染症拡大防止のため見学できなかった。

ゼミ生たちの中には、つぎのような総括がみられた。

◇実際に現地に行かないとわからない感覚を体験できたことが収穫であった。

◇遺骨発掘現場や「笹の墓標展示館」の立て看板などに、朝鮮人労働者が死にいたった痕跡が感じられた。

◇熊笹が生い茂る共同墓地には、たしかに遺体が埋まっていなくてもおかしくない雰囲気があった。

学生研修記

今島 心菜

地域経済学科 2年
道愛女子高校出身



森下 龍弥

地域経済学科 3年
苫小牧東高校出身



きれいな朱鞠内湖のやるせない歴史

朱鞠内に着いたときの最初の印象は、人の少なさと、まわりの静けさで、そこではゆったりと時間が流れているような異様な感覚がありました。どこまでも続く広い朱鞠内湖は、観光で来たのなら、きれいな湖という印象で終わったかもしれません。けれどもここは人造湖で、この湖やダムが造られる過程で多くの人が命を落としていると知ったとき「ただのきれいな湖」で終わらせてはいけないと思いました。

光顕寺（笹の墓標展示館）跡の立て看板には、1970年代から犠牲者の遺骨を遺族のもとに返す運動があったと記されていましたが、遺族たちは遺骨返還を素直に受け入れられなかっただろうと思うと、やるせない気持ちになりました。遺骨発掘現場には花が供えられており、何十年もたった今でも誰かが覚えていることを思うと、歴史を知り、受け継ぐことが大切なのだと、あらためて気づかされました。

打ち捨てられた遺体の掘り起こし現場

地域研修では、朱鞠内湖の背後にひそむ強制労働の跡を、身をもって体感して知見を深め、あらためて朝鮮人労働者問題に向き合うことが目標であった。雨竜第一ダム建設時に殉職した人は、展示資料によると日本人が168名、朝鮮人36名の計204名であるという。ダムの横には今日、10メートル近い高さの「殉職者慰霊塔」が建てられている。この慰霊塔がだれのために建てられたのかは不明であるが、ほかの建造物と比べるととても大きく、異様な存在感を放っていた。

遺骨発掘現場には、比較的新しいとみられる日本式の多数の墓と、その奥に土を山のように盛り上げて作られた朝鮮式の墓が1つあった。この墓は、かつて朝鮮人労働者の遺体が墓に埋められることなく捨てられ、ただ林の熊笹が墓標代わりをなすだけであったのを、東アジア共同ワークショップの人々が掘り起こし、あらためて祀られたものである。

1部 水野谷武志ゼミⅡ

参加学生数20名



水野谷 武志

地域経済学科
教授



上：旭川班・旭山動物園にて
下：豊浦班・天然豊浦温泉しお
さいにて



持続可能な観光とは何か

研修地：旭川市・豊浦町

●研修目的

コロナ禍によって観光が落ち込む
込む中で、地域における観光の持続可
能性が今後ますます重要になる。そこ
でゼミ20名を①旭川市グループと②
豊浦町グループに分けて、都市型観光
と非都市部の観光を具体的に体験し、
関係者から話を聞き、持続可能な観光
とは何かを考える。

研修先・日程

- 11月2日 旭川市旭山動物園を見学し、動物園職員
と意見交換。
旭川観光コンベンション協会を訪れ、協会
職員と意見交換。
旭川中心市街地を散策。
- 11月4日 豊浦町噴火湾展望公園の展望台から海岸
線を一望する。
噴火湾とようら観光協会が主催する体験
ツアー「サケそ上見学&サケさばき・イクラ
づくり体験」に参加。具体的には①いぶ
り噴火湾漁業組合豊浦支部にて海産物の
セリを見学→②「すいしゃ」（豊浦町地場
産物販売加工施設）にてサケさばき・イク
ラづくりを体験→③インディアン水車公園
でサケの遡上についてレクチャーを受ける
→④「すいしゃ」にもどり、昼食としてサケ
のフライといくら丼を堪能する。
豊浦町地域交流センター「とわにー」で観
光協会職員と意見交換。
道の駅とようらを視察。
天然豊浦温泉しおさいを視察（温泉に入る）。

写真①べんざん館のもぐもぐタイム。②旭山動物園
職員への取材。③セリ見学。④サケさばき体験。⑤
サケの遡上についてのレクチャー。⑥噴火湾とようら
観光協会職員への取材



●総括

①では旭山動物園職員との意見交換によって、園は旭川市
の公営施設なので、利益を求める運営ではなく、旭山動物園
が大事にする思い「動物が幸せに暮らせて、それを見てい
るお客さんも幸せになれる施設」が追求できていることを学んだ。次に旭川観光コンベンション協会職
員との意見交換によって、コロナ禍で様々なイベントが開催できなくなった悲しみや苦労を知ることがで
きた。今後は、住民の理解を得ながらイベント再開を目指すとともに、道北圏域の交通・経済・行政の
中心的地の利を活かし、周辺の市町村と協力した広域的な観光を目指そうとしていることを学んだ。

②ではガイド付きツアーを体験した上で観光協会職員と意見交換できた。コロナ禍で観光客が激減
する中でも、地元の産業・自然・食・文化などの資源を組み合わせ、四季折々の体験プログラムが用
意されていることを知った。このプログラムには、地元とつながりながら町を元気にしていこうとしてい
るガイド及び観光協会職員の存在が大事であることも学ぶことができた。

この2つの研修から、持続可能な観光として、観光客と地域の関係者一住民・観光業者・地場産業
をうまくつなげることが重要であると感じた。

学生研修記

村山 詩央里

地域経済学科2年
大麻高校出身



旭川市と観光

私たちは持続可能な観光をテーマに旭川市で研修
を行いました。

そこでまず旭山動物園を訪れ、その後旭川観光コ
ンベンション協会ですれぞれ職員の方からお話を伺
いました。旭山動物園では2～3時間ほど園内を観
光した後に主査の方にインタビューしました。公営
の動物園であるため経営を意識はしていないが、い
かに来園者に楽しんでもらうか、命の大切さを伝え
るかを大事にしており、より動物と来園者を考えた
展示の仕方をするのが来園者の満足に繋がってい
ると話してくださいました。観光協会では地域住民
との繋がりが深いという旭川市の特色を生かして地
域住民との足並みをそろえ、周辺地域とも連携した
観光を行っていくと教えて頂きました。双方ともに
コロナによる打撃が大きいことを感じましたが、来
園者や地域住民など周囲との関係を最も大切に
観光を進めていることがわかりました。

関根 壮志

地域経済学科2年
札幌白石高校出身



コロナ禍での持続可能な観光

今回私達は持続可能な観光をテーマとして、2つ
のグループに別れ、旭川市と豊浦町に研修として向
かいました。私は豊浦町の方に向かい、鮭・イクラ
作りの体験や海産物の競りなどの見学のツアーや、
温泉や道の駅を訪問し、ツアーの時に豊浦観光協会
の田中さんに質問をさせて頂きました。ここ近年観
光業に大きな影響を与えているコロナウイルスによ
る変化とコロナ禍での工夫などをお聞きしました。
やはりコロナ前より観光客の数は減っており、イベ
ントもツアーも大きく減ってしまっていました。そ
のための工夫としてツアーを大人数で行うものでは
なく、お手軽かつ豊浦町でしか体験できないものを
意識したり通信販売を充実させる工夫を行っていま
した。このようにコロナ禍によってツアーなどが少
なくなっても、様々な工夫を行っており、これから
先も観光業を盛り上げていきたいという意志を強く
感じ、とてもいい研修になりました。

1 部 宮入隆ゼミⅠ・Ⅱ

参加学生数22名



宮入 隆

地域経済学科
教授



JA いしかり本所入り口にて

都市近郊農業の存立条件と課題

研修地：石狩市

●研修目的

都市近郊農業は、規模拡大による経営発展が困難である一方、市場条件としては優位性があり、従来の「北海道らしさ」とは異なる地域農業の発展がみられる。その典型といえる石狩市を事例に、都市近郊産地の現状と地域農業新興の課題を明らかにすることを目的にした。

研修先・日程

11月14日 JA いしかり営農部
JA いしかり直売所「地物市場とれのさと」
11月15日 コウサン・ファーム（農業者：遊佐宏文さん）
石狩市役所農政課

写真① JA いしかりでの研修風景。② 直売所見学。
③ 宮入ゼミがデザインした自販機の前で。④ 農業経営を語る遊佐さん。⑤ ミニトマトハウス見学。⑥ 芋掘り体験。⑦ 石狩市役所での研修風景



●総 括

大都市圏に隣接する石狩市であるが、地域農業は多品目園芸を中心に、水稲・畑作・畜産まで多様な顔を持ち、存立する個別経営も同様である。かつて、都市化の波にもまれながらも活発な生産活動がみられる大都市圏の農業に対して、「どっこい生きている都市農業」という表現が用いられた。まさに今年度の研修においては、多様性を活かした地域農業の力強い展開とその支援に圧倒されることとなった。

自治体と農協の連携による農業総合支援センターは、女性農業者や定年帰農などへ門戸も広げた支援が実を結び、さらに、労働力確保のためのグリーンサポーター事業も、近年みられる人材マッチングの先駆けといえる取り組みであった。

他方、多様な担い手の受け皿であり、また、トレーニングの場としても位置づけられた農協直営の直売所「とれのさと」は道内でも有数の販売実績を誇るが、通年営業に加え、2018年のブラックアウト時にいち早く住民のために食料供給を始めたことが評価され、「災害時対応ファーマーズ・マーケット」の第1号に認定された。学生たちはこのような実態に触れ、地域と農業が「ともに支え合う関係性づくり」が農業の持続的発展のポイントであると結論づけた。

学 生 研 修 記

柴田 優輝

地域経済学科 2 年
音更高校出身



コロナ禍でも販売を伸ばす産地の姿

私たちは石狩市を事例として、都市近郊農業の特徴と課題を探ることをテーマに研修を行いました。石狩市農業は多品目の野菜生産を中心とした産地であるという特徴があり、多くの地域と同様に担い手と労働力が不足している状況です。その問題を解決するため、石狩市では資金面の補助や単身女性でも就農しやすくするような新規就農策を実施していることが分かりました。

研修に行く前は、コロナ禍によって農産物の価格や出荷量が下落するなどの悪影響が生じているのではないかと考えていましたが、現実とはまったく逆で、農協などで聞き取りをすると、コロナ禍でも販売実績を伸ばしていることが分かりました。とくに最も近い出荷先である札幌市卸売市場への出荷は増え、直売所でも売り上げを伸ばしていることには驚きでした。コロナ禍にも負けずに農業生産が行われていることに感銘を受けました。

三井 梨紗子

地域経済学科 2 年
札幌平岸高校出身



地域から支持される農業になること

石狩市は道内最大の消費地である札幌と隣接しているため、市場条件に恵まれているという特徴があります。その立地条件を活かして、定年帰農や女性の新規就農者など、多様な担い手が、小規模ながらも力強く営農している点は、都市近郊だからこそその面白さだと思いました。

それら多様な担い手の主要な販路となっているのが、JA いしかりの直売所「とれのさと」です。市場出荷を主とする大型流通に合わせた販売事業には適さないとしても、直売所では小規模な担い手が作り出す多種多様な作物が「品揃え」として強みになります。リタイヤした農家にとっては、直売所への出荷が生きがいになっています。他方で、地域住民は新鮮な地場農産物を支持し、買い支えているのです。それが直売所の販売実績として現れています。地域と繋がり、支持されることこそが、農業振興のカギになると実感しました。

2部 宮入隆ゼミⅠ・Ⅱ

参加学生数8名



宮入 隆
地域経済学科
教授



天間農産本舗の圃場にて

総合野菜産地からみた北海道農業の未来像

研修地：富良野市

●研修目的

全国有数の総合野菜産地として存立する富良野市を事例に、生産から集出荷・販売、加工事業までの産地対応の実態を明らかにし、そこから北海道農業の維持・発展の方向を「未来像」として描き出しつつ、地域農業振興の課題を探ることを目的とした。

研修先・日程

10月25日 富良野市役所農林課
富良野チーズ工房
10月26日 JAふらの営農部
(株)天間農産本舗

写真①富良野市農林課での座学研修。②富良野チーズ工房でのバターづくり体験。③製造したバターの完成品を持って。④玉ねぎの集出荷施設にて。⑤直売所で農協製造のポテチとともに。⑥天間農産にて。⑦天間農産の農業倉庫にて。



●総括

上川南部の富良野盆地一帯を管内とするJAふらのは、2001年に広域合併してから、ちょうど20周年の節目を迎えた。農協調査では、それも踏まえて小河健伸営農課長が、地域農業および担い手の変化を時系列的、かつ地域的な差異にも触れながら俯瞰して下さった。この多様な地域農業を一つの野菜産地としてまとめていく産地マネジメントの高さがJAふらのの真骨頂である。農協子会社も含めた生産段階での労働力支援は、道外産地との連携でさらに進化し、集出荷段階での施設拡充による省力化と安定供給の高度化の実現、そして販売面における生食用/業務需要対応、加工事業の展開など、まさにポスト・コロナをも見据えた多元的展開を確認できた。

先進的な農業振興策を展開する富良野市農林課の調査では、自動操舵技術など新たな技術導入を前提にした基盤整備事業が学生の関心を惹きつけた。GPS基地局の設置など、スマート農業のための基盤整備の重要性を再度認識させられた。

他方、スイカを中心に大規模生産法人として独自展開する天間農産本舗では、大ロットを活かした取引先との契約手法を深掘りさせて頂いた。また、技能実習生への福利厚生の実態も特筆すべき事例であった。

学 生 研 修 記

堤 海斗
地域経済学科 2年
名寄産業高校出身



驚かされた農業生産法人の高度な取引手法

私たちのゼミでは、北海道農業の未来像と地域農業の振興方策を探るため、総合野菜産地として先進的な発展を遂げてきた富良野市にて地域研修を行いました。研修で私が調査を担当した農業生産法人・天間農産本舗は、スイカ生産で日本一の規模を誇ります。生産面では、青果物と小麦を取り入れた独自の輪作を行い、経営面ではJGAPを取得して、雇用する従業員の福利厚生などさらなる経営改善に取り組む実態を明らかにしました。

とくに驚かされたのは主要生産品目であるスイカやメロンの契約手法です。天間農産では、新たな「庭先取引」とも呼べる独自の契約取引を採用しており、農場からの出荷段階で取引価格を決め、輸送費を含むそれ以降の費用は全て販売先が負担するという特徴的な取引をしていました。今回の研修で得た成果を、次年度からのゼミ活動や卒業研究に活かしていきたいと考えています。

古川 拳成
地域経済学科 2年
滝川高校出身



地域農業振興のために関係機関の連携を！

私たちは「総合野菜産地から見た北海道農業の未来像」をテーマに、富良野市で研修を行いました。富良野市では人口減少に伴う農家戸数の減少が著しいですが、同市内の地域の土地条件によって、担い手（農業者）と雇用労働力不足それぞれ抱える問題が異なることがわかりました。また、このような農業構造の問題に対して、自治体と農協が連携して課題に取り組むなど、富良野市はとても先進的な地域だと実感できました。さらに富良野市では、それらと並行して新たな生産高度化のための整備に取り組んでおり、企業と連携してGPS基地局の整備なども行っています。

地域農業振興のために自治体と農協・企業が連携することは、富良野市だけではなく、北海道農業全体にとっても重要なことだと思います。今回の研修で得た知見をもとに、北海道農業の未来についてさらに考えを深めていきたいと思っています。

1部 山田誠治ゼミ

参加学生13名



山田 誠治
地域経済学科
教授



十勝岳をバックに

富良野市のスマートシティを探る

研修地：富良野市

●研修目的

テーマ「ICTによる地域活性化」について、その先進的な取組・新しい推進計画を進めている富良野市役所のスマートシティ戦略室の方々から、市役所業務のデジタル化やAIオンデマンド交通の実証実験について聴取し、そのオンデマンド交通や公共通機関に関するアンケートを富良野駅前と富良野協会病院前で行い、その可能性について調査することを目的とした。

研修先・日程

- 10月18日 富良野市役所説明会
富良野駅前・富良野協会病院前で、
オンデマンド交通導入についての住民
アンケート調査
- 10月19日 ふらのマルシェ見学
自由行動

写真①富良野市役所の説明会はペーパーレス。②これから協会病院前アンケート。③ちょいのりタクシーの実験。④人気のない駅前でアンケート。⑤富良野マルシェは地元産。⑥イングルテラスは有名スポット。



●総括

テーマにした AI オンデマンド交通の試行についてだけではなく、庁舎内の IoT 導入と働き方改革にもつながる全面的なデジタル化の構想について、詳細に聞くことができた。連携している企業の方からも含め、議事録の音声テキスト化や行政手続きのデジタル化、押印の見直しによるペーパーレス化など、各部署全体にわたって検討してきた経過と進め方についてまた、導入の苦労話も含めて解説され、学生にとっても非常に重要な話が聞けたと思う。

また、デジタル健康都市とスマホを利用して市民の健康管理の計画について、実際の担当の方から話を聞くことができ、質疑が交わされ、皆イメージが膨んだようだ。ICT 化の課題や疑問も浮かんだようで、学生にとって学ぶところが多かったと思われる。

AI オンデマンド交通のアンケート調査については、丁度この時期に AI オンデマンド交通の実証実験が始まったばかりということもあって、アンケートの回収の数は多くはなかったが、逆に一人一人に詳しく話が聞けるケースもあり、地元の方の色々な考えや感想などを直接受け止められる機会ともなり、今後の可能性と課題について実感できたのではないかな。

学生研修記

小松 修瑠
地域経済学科 2 年
苫小牧東高校出身



ICTを必要としている人は一体誰なのか、について考える

富良野のオンデマンド交通について、地域住民対象のアンケート調査を行いました。体感ではAIを使ったこのサービスについて知らない人が多いと感じた、というか知ってる人がいなかった。まだチラシを配って初日ということもあっただろうし、質問の仕方も「AI オンデマンド交通」ではなく「ちょい乗りタクシー」と聞けば、もう少し知ってる人がいたかもしれない。

市役所では、富良野地域IoTの導入について説明会に臨んだ。説明会そのものもペーパーレスで行われ、富良野市が開発局の事業に指名されていること、市役所内のデジタル化での大胆な導入と効率化が進められようとしていることなど、私が知らなかったことが多く、IoT実装計画の現場の具体的な内容に大変興味深かった。最後にこのICTの導入では「必要としている人は一体誰なのかを考える」という説明で言葉が印象に残った。

青木 美来里
地域経済学科 2 年
平取高校出身



市外からの利用について課題がある

今回ゼミでは、富良野駅前と利用者がいそうな富良野協会病院前で、オンデマンド交通を導入する住民アンケートを行った。私が担当したところで思ったのは、バスの利用者は少ないがJRを使う学生が思っていたよりも多く感じた。

公共交通の利用については、その利用者が行動する範囲がいろいろあると思うが、こういった人は富良野市に住んでいないが通勤通学をしているという人だと思われ、この人たちは「ちょいのりタクシー」が富良野市に住んでいる人が対象となっていたため利用できないと考えられ、市外から通っている人も利用できると便利なのではないかと思った。だが、こういった対象者や範囲、運行時間の拡大は、これからの導入の方法、広報、価格などの結果次第となるため、今後、実行が進んだ結果とその後の内容に興味を持った。



1部 山田誠治ゼミII

参加学生数12名



山田 誠治
地域経済学科
教授



安平町役場前

安平町のデジタル・情報発信

研修地：安平町

●研修目的

胆振東部地震からの復興を、デジタル技術を教育や行政へ積極的に導入して乗り越えようとしている安平町を訪問し、その実態と課題について調査し、「起業」や「はやきた子ども園」の取組についても直接聴き取り調査を行い、新しいまちづくりについて調べたことを目的とした。

研修先・日程

11月11日 はやきた子ども園を訪問する。
安平町役場で、起業・情報発信・義務教育学校の説明を受ける。

●総括

学生たちにとって、「安平で安心子育て」を多く実感できた調査訪問であった。

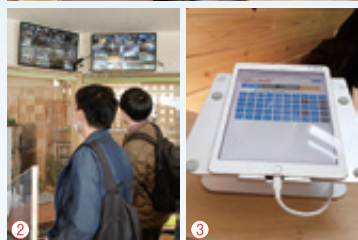
新しい運営組織となった「はやきた子ども園」では、ペーパーレスを目指して連絡事項を紙からデジタル化し、園内職員もMac・iPodを幅広い世代で使用し、事務管理業務の効率化を可能にしていた。そして、広大な園内でも職員間のコミュニケーションが円滑にでき、デジタルを活用した、のびのびした園づくりを目の当たりにした。

安平町のまちづくりでは、起業家カレッジ『Fanfare』では地元理解に工夫をした起業家を引き付ける取り組みは納得できるものであった。情報発信については、自治体とは思えない柔軟な戦略で地域の魅力を伝え、外部への発信にSNSを有効活用し、採用ではWantedlyを利用していたことは、就活に直面している学生にも強い印象を残した。

震災で改築が必要になった中学校再建では、小学校と合わせた9年一貫の新しい義務教育学校を計画し、その構想について詳しく解説を受けた。ここでもICTを使い、空間を一体的に使用して地域住民の利用も促し、子供のみならず町民全体が学べる場とし、町と学校を分けない一体の環境をつくる“共創”の場の意味を実感できる研修であった。

学 生 研 修 記

写真①はやきた子ども園の職員室で説明を受ける。
②デジタルカメラで園内が一望。③登園の受付も自動化。④子ども園の玄関。⑤建設中の義務教育学校。
⑥安平町でOBから説明。⑦アビラチョウエンジン。



岩崎 竜平

地域経済学科3年
岩見沢西高校出身



教育に力を入れICTを活用した魅力あるまちに

訪問したはやきた子ども園では、全体的な感想としては園内がとても広く設備が充実しており、馬の飼育や田んぼなど豊かな自然と触れ合い様々な体験ができる素晴らしい環境でした。さらに、従業員一人Mac一台やiPad、iPod touchを活用して業務の効率化を行い、監視カメラの導入で従業員や園児の安全性を確保し、教育方針も子供の主体性を重要視し伸び伸びと成長できる空間だと思いました。

安平町では教育に力を入れており、Fanfareでは起業創業者と移住を連動させていることで人々の転入を促しており、特に注目したのはMONETの配車プラットフォームであり、まだ実装されてないものの、普及すると住民の移動の利便性の向上が期待できるといった。高齢者のスマホ教室も、以前の地震を経てすぐに情報を得ることが必要と考える高齢者の参加率が高く、うまく利用者を広げていると思った。

榮森 圭祐

地域経済学科3年
北広島高校出身



ICTの積極的活用を安平町現場で確認

私たちのゼミでは、ICT・IOTを導入している地域の現状を踏まえた上でどのような改善が必要なのかを考えており、安平町へ地域研修に行きました。安平町は人口が1万人も満たない小さな町でした。ICT・IOTを導入することで人口流入を目指すのではなく、今いる町民たちがより良い生活を送ることを目指している珍しい地域です。特に子育てに力を入れ、子ども園の完全ペーパーレス化や新設学校への新技術導入などが行われており、今後の教育環境整備の先駆けとなっていました。その中で非常に印象的だったのは子ども園の入り口にて顔認証で鍵が開くところでした。自身の顔を登録することによって、安全面の保証、作業の効率化が図られていました。このような新技術に子供が当たり前のように触れることによって、子供たちが自然にIC機器に親しみを覚え、主体的に活用している姿が見られました。



⑦

abiracho^{engine}
アビラチョウエンジン

自分たちが町のエンジンだ。
進め、安平町。



2部 山田誠治ゼミ1・II

参加学生12名



山田 誠治

地域経済学科
教授



倶知安町の説明を終えて

新型コロナ禍での観光計画の実施状況について

研修地：倶知安町

●研修目的

ゼミのテーマである観光による地域活性化について、倶知安町の先進的な取組・新しい観光振興計画について、現地の状況と課題を調査する。特に、閑散期の対応や観光のデジタル化について、問題意識を持ってその調査を行うことを目的とした。

研修先・日程

11月11日 倶知安町役場訪問
十字街探索
11月12日 HANAZONO 地区見学
自由行動
ラフティング体験

写真①② 倶知安町の政策説明と聞き入る学生。③十字街もひっそり。④羊蹄山のすばらしい景観。⑤ペンションでにぎわう。⑥高級リゾートをめざす。⑦贅沢な景観です。⑧ラフティングでは外国人にお世話になります。



●総括

倶知安町の観光課題である、来訪者数の季節変動に対策として、進められている地域の自然を生かした新しい開発、デジタル技術の導入、特に観光デジタル化についての施策について詳しい説明を受けた。

まず、ホテル・旅館の予約から客室管理、請求までを処理する宿泊施設の基幹システムを導入し、複数の旅行会社やインターネットでの予約管理を効率的に行うためのPMSの整備についても説明を受けた。これまでは、行政による半年に一回の即時性に欠ける傾向把握しかできなかったが、PMSの自動連携によって、直近の状況把握、気象データと関連づけた分析も可能となり、登録協力施設が多くなれば、アクティビティの利用状況や観光施設の来訪状況とのクロス分析も実現することと、その効果が期待できるものであった。

こうしたリアルタイムの対応やAIチャットボットも活用しながら、スムーズなチェックインやチケット無しで交通機関に乗車可能なシステムも開発するなど、シームレス化で飛躍的なサービスの向上が期待できる、とのことで、学生も確信をもったようだった。国際的な観光地を目指し、広範囲に及ぶ町の大胆な挑戦は印象的なもので、学生にとっても学びの良い機会となった。

学生研修記

西海 諒茉

地域経済学科 2年
寿都高校出身



佐々木 凜

地域経済学科 3年
札幌月寒高校出身



ICTの積極的活用を安平町現場で確認

倶知安町では、グローバル化を意識したスマートリゾート化という取り組みがあり、マスタープランの名称でプランニングしていることが印象的でした。

日本は他先進国と比べ、デジタル化が遅れており、技術や繁栄が一步遅れていると実感していましたが、しかし、リゾート地では、従来の日本の面影を感じない情景を目にしました。セキュリティ対策があるWIFIがどこでも接続できることやキャッシュレス決済を有効に使いコンビニやホテル、飲食店、バスなどもすべてスマホやICカードで支払いできるサービス事業の展開は、今後の日本全体のグローバル化にも、影響を与えるのではないかと実感しました。

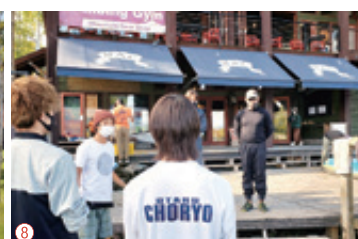
私は倶知安町には、スノーボードや買い物でよく訪れていて、今までは、「グローバル!」、「スマートリゾート化!」という観点で見たことはなかったので、新鮮な気持ちで研修期間を過ごしました。

閑散期の実態

私たちは10月に倶知安町を訪れたのですが、オフシーズン＆コロナの影響なのか閑散としていて、当初予定にあった街の方へのアンケートを実施することができませんでした。

1日目は市役所の方から話を聞き、事前学習で読み込んだ「倶知安町観光地マスタープラン」の進み具合や新たな悩み、今後の展開などをリアルタイムで知ることができました。2日目は HANAZONO 地区を見学した後、ラフティングを体験しました。秋にやるものではないと思っていましたが、寒さも忘れるくらい興奮し、太陽が反射したきれいな川やすぐ近くにそびえ立つ羊蹄山に圧巻されました。

実際に訪れてみて、やはり大自然を生かしたアクティビティが体験できるのは強みであると感じました。また、グリーンシーズンからスキーシーズンに切り替わる間の時期ならではのコンテンツが新たにできれば、1年中観光客で賑わうまちになると思いました。



地域研修報告会

2021年12月18日 21番教室、22番教室、32番教室、40番教室、50番教室、60番教室、D30番教室

12月18日(土)、「地域研修報告会」が開催されました。7会場にわかれ、32グループが研修成果の報告と質疑応答を行いました。この報告会は、2ページ目の「1年間の流れ」で示されるように、この間の成果を披露する重要な機会となっています。

2021年度は、前年度同様、コロナ禍が続いており、夏季休業中に緊急事態宣言が発令されるなど、現地研修実施にあたって様々な困難がありました。そのような中、各ゼミは研修時期や地域、内容を変更するなどの工夫を重ねて、報告会に至りました。

報告会では、各グループが、研修テーマやその背景、実施日程や訪問箇所の説明、テーマに対して研修から明らかになったこと、などを現地研修や事前・事後学習の成果を活用して発表していました。今年の研修テーマは、森林を活用した地域づくり、宮城県の酒蔵の特徴、買い物難民問題、協同組合組織のSDGsの取り組み、観光資源としての鉄道の活用、等、北海道や日本が抱える重要な地域課題に真摯に向き合ったものが多くみられました。また、報告の内容からは、ゼミ内で、どのような成果が得られたのか、議論を重ねていた様子を想像することが出来ました。さらに、発表後の質疑応答では、多くの質問がフロアから出されました。その内容の多くは、単なる事実確認（一問一答）ではなく、発表者と質問者が、議論を深め合うものでした。

なお、一部のゼミは、コロナ禍のために、報告会後の現地研修を予定しており、この場合には「中間報告」の位置づけとしました。この報告に対しては、他ゼミの学生から、自らの経験を踏まえたアドバイスのようなコメントもあり、ゼミの垣根を越えて地域研修をより良いものにしようとする姿も見られました。

様々な制約下で実施された今年の地域研修でしたが、今回の貴重な経験は、今後の学修や社会生活にとって大きな糧となるものと思われます。

◎報告ゼミ順序と研修地

●21番教室 [26名] 運営担当：藤田先生

①平野 1部Ⅰ（札幌） ②西村 1部Ⅰ・Ⅱ（浦幌） ③大貝 2部Ⅰ・Ⅱ（函館・木古内） ④内田 2部Ⅰ・Ⅱ（函館）

●22番教室 [44名] 運営担当：上園先生

①内田 1部Ⅰ・Ⅱ（恵庭） ②西村 2部Ⅰ・Ⅱ & 濱田 2部Ⅰ・Ⅱ（沼田・赤平・芦別） ③佐藤 1部Ⅰ（江別・札幌） ④山田 2部Ⅰ・Ⅱ（倶知安）

●32番教室 [44名] 運営担当：濱田先生

①浅妻 2部Ⅰ・Ⅱ（厚真） ②佐藤 1部Ⅱ（札幌） ③平野 2部Ⅰ・Ⅱ（札幌） ④西村 1部Ⅰ・Ⅱ（白老） ⑤大貝 1部Ⅰ（十勝）

●40番教室 [85名] 運営担当：浅妻先生

①宮入 1部Ⅰ・Ⅱ（石狩） ②古林 1部Ⅰ（札幌） ③藤田 1部Ⅰ（秋田県） ④濱田 1部Ⅰ・Ⅱ（洞爺湖） ⑤水野谷 1部Ⅰ・Ⅱ（旭川・豊浦）

●50番教室 [66名] 運営担当：佐藤先生

①浅妻 1部Ⅰ・Ⅱ（北見・網走） ②上園 1・2部Ⅰ（豊富） ③川村 1部Ⅰ・Ⅱ（札幌） ④宮入 2部Ⅰ・Ⅱ（富良野）

●60番教室 [52名] 運営担当：内田先生

①山田 1部Ⅱ（安平） ②水野 1部Ⅰ・Ⅱ（幌加内） ③古林 1部Ⅱ（洞爺湖） ④早尻 1部Ⅱ（札幌・鹿児島県垂水）

●D30番教室 [49名] 運営担当：川村先生

①大貝 1部Ⅱ（宮城県） ②平野 1部Ⅱ（函館） ③藤田 2部Ⅰ（沼田） ④山田 1部Ⅰ（富良野） ⑤西村 1部Ⅰ・Ⅱ（下川）



◎研修報告会の学生の感想文(一部改変)を紹介します

☑ 各ゼミ報告で多くの質疑・応答があり、様々な討論を聞くことが出来、自分には考えることが出来なかった意見や政策を学ぶことが出来た。様々な分野で北海道の現状を確認する機会となった。他の教室で行われたゼミの報告も資料で学び、知識を身に付けたいと感じた。

☑ どのゼミの報告もわかりやすくパワーポイントが作られていたし、内容もまとめられていて聞きやすかったと思います。質問を積極的にする人も多く、自分も見習いたいと思いました。

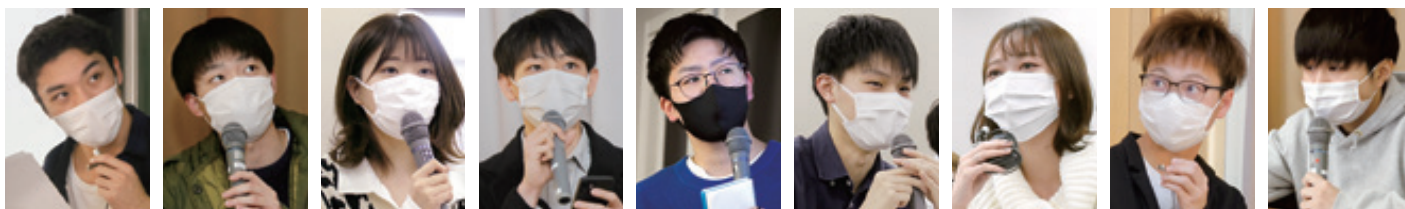
☑ 川村ゼミの報告(コロナ下の学生アルバイト)は、自分たちでアンケートを作ったり、実際の数値を使って報告ができていたりしたのでわかりやすかった。タイムリーな話題だったので、とてもためになった。

☑ 聴いている人々に伝えるのが大事なので、おおまかに話す部分と具体的に話す部分とで、めりはりをつけるとよいように思いました。

☑ 文字だけのスライドでは、読むのに苦労することがあると感じました。また、質問されそうなことを事前にまとめておくことが大切だと思いました。

☑ 各ゼミの報告を聞き、北海道にはいろいろな地域があるのだと感じました。異なる国のように気候も活動も、かかえる問題もさまざまで、自分の知らない地域がたくさんあることを思い知らされました。

☑ どのゼミでも、スライドをつくるなど、報告内容をわかりやすくする工夫がなされていましたが、質問になると的確に答えられない場面がありました。自分たちの報告をほかの人々が聞いたときに、わかるかどうか、どう感じるか、という疑問が生じるか、などを客観的に考えてみる必要があると思いました。





地域研修における感染拡大防止対策

経済学部では、感染拡大防止のために細心の注意を払いながら、地域研修を実施しています。実施する場合には、宿泊施設や交通機関が、業界団体等の「ガイドライン」に沿った感染拡大防止対策を十分に行っているかどうか、経済学部として確認する手続きを経ています。また、飲食の場、研修時の訪問先における感染予防を徹底することを前提として、研修の実施を認めています。さらに、各教員は、現地研修実施前後の学生の健康観察、研修中の手洗い・咳エチケット・マスク着用・「三密」状態回避にも留意しました。なお、緊急事態宣言発令中は研修を実施しておらず、延期（中止）しました。

北海学園大学 経済学部

地域研修報告書 2021



北海学園大学 経済学部

〔経済学科・地域経済学科〕

〒062-8605 札幌市豊平区旭町4丁目1番40号

TEL : (011) 841-1161 (内線2222)

<https://www.hgu.jp/>

<https://econ.hgu.jp/>

2022年3月発行

制作(株)ラボット